

# TS暗殺者、異世界で冒 険する

布団から出られない

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異世界に転生したら女の子になってた!? しかも自分の住んだ村は燃やされて同年の子供達は皆売り捌かれちゃった! 俺は暗殺者の適正があるから生かされたけど……人なんて殺したくない! どうしよう……

暗殺者要素は最初だけです。プロローグ時点では登場してませんが、後々ハーレム勇者が登場して勇者パーティの一員になります。

俺はメス堕ちはしないからな! って感じの作品です。GLは保険です。

※『小説家になろう』様にも投稿しています。

# 目次

プロローグ	1	WANT MUSCLE	79
あれ？いつのまにか勇者パーティ入り!?	7	技術は時に筋力をも超越する	88
ちびどらごんはかあい	16	人の脳を覗く時は脳破壊に注意しよう!	95
B Lと精神的B Lは別物である(真理)	26	筋肉で解決しないこともある	103
浮気はやられてもやるな	36	好きに性別は関係ない	113
羅針暗魔剣ドラゴンツヴァイ・グレイ	46	勇者にだって悩みはある	126
ドインフィニティ	57	コケコッコー!!!!!!	135
muscle	69	外出禁止令!! 良い子はお家で遊ぼう!!	143
運動不足は身を滅ぼす	69	後悔しても後悔しても、過去は変わらな	150
		い	158
		安殺	158

ボクは勇者パーティが好き | 167

久しぶりに会おうと別人みたいになってる

幼馴染っているよね | 176

閑話1 メス墮ちの心得 | 187

## プロローグ

突然だが俺は死んだ。

死因はよく覚えていない。いや、思い出せないが正しい。

転生してから色々とシヨツキングなことがあったせいで、前世の性が男だったと言うことしか思い出せなかった。

俺が転生したのはいかにも田舎って感じの村だった。

女として転生したのには驚いたが、村の人たちは優しく、子供たちも毎日元気に走り回ってる。

平和な村だった。

俺が6歳になった頃。

腹の出た胡散臭い貴族のおつさんが村にやってきた。

村長と何か話していたようだが、その頃の俺は子供らしく振る舞うために村の子供たちの遊びにまじってたものだから何の会話をしていたのか分からなかった。

もしあの時話を聞いていたら、と思うことはあった。が、前世の状態ならまだしも、こんな幼い女の子の体じやできることなんてたかがしれてる。仕方がなかったんだ。

そして数ヶ月後。

やつらはやってきた。

黒尽くめの格好をした忍者みたいな集団だ。

やつらは村を焼き払い、大人の男達を殺し、女と子供だけを拘束した。

俺は何も出来なかつた。ただ怯えて震えることしかできなかつた。

馬車に乗せられ、どこに行くのかも分からないまま揺られる。

子供達が泣き喚く。

当然不安だろう。

俺も泣きたかつたが、前世の大人の男としてのプライドが残っていたのか、涙は溢れ

ずに済んだ。

お陰で助かつた。目的地に到着した途端、泣き喚いた子供達の手足がもぎ取られたか

らだ。

一瞬だった。——魔法。この世界には魔法がある。やつらが使ったのはどうやら

魔法らしい。

だが俺だけは五体満足だった。

肝が据わってる——そう言われた。

手足をもぎ取られた子供達は、どうやらそういう趣味の貴族に売られるらしい。

俺にできることは何も無い。

仕方なかった。

男が言う——ついでこい——と。

俺は男に言われる通り男の後ろをついていった。

従えば殺されることはない——そう思ったからだ。

俺は助かる。しなずにすむ。だいじょうぶ。だいじょうぶ。大丈夫。

ふと、後ろの様子が気になる。先程手足をもがれた子供達はどうかやら魔法の治癒で死に損なっているらしい。

見ない方がいい——そう思っているも人間好奇心には勝てないらしい。

振り返ると

虚ろな目をしてこちらを見つめる手足のない幼馴染の少女の姿があった。

そうして俺は暗殺者になった。

最初の暗殺は——吐いた。

人を殺すというのはそれだけ気持ち悪い感触だった。

暗殺対象には悪人しかいなかったが、それでも後味は悪かった。

そんなある日——1人の少女の暗殺依頼が出された。

現在の国の王様の娘らしい。

依頼を受けていつも通り誰にも気づかれないうように少女の部屋に潜入した。  
10歳ぐらいの少女だった。

関係ない——今まで何人も殺してきた——ためらうな——

少女に手をかけようとしたその時、俺の脳裏に幼馴染の姿がよぎった。  
手足をものがれ虚ろな目で俺を見つめてくる彼女。

俺は——また——

自分が殺さなくても、他の暗殺者に依頼が行く。

——そんなことは分かってる！

だがどうしても俺の中で納得できないものがあつた。

ナイフを持つ手が震える。

大丈夫——むりだ——大丈夫——いやだ——だい……ぶ……——ころした

くない：

カチャンツ

いつの間にか俺はナイフを地面に落としていた。

ナイフを落とした音で少女が目覚めます。

まずい……逃げないと……

しかし少女の射抜くような視線のせい、俺の足は一步も動かない。



どうすればいいのか分からず混乱している俺に、少女が言葉を投げかけた。

「どうして——ないているの？」

ここから先のことを俺はあまり覚えていない。

気づけば王国の騎士らしき人たちに拘束されていて、目の前の少女の顔がひどく驚いていたのは覚えてる。

そして俺は——暗殺者をやめた。

俺の雇い主は王国の騎士によって制圧されたらしい。

裏で糸を引いていた貴族も全員独房の中だ。

一瞬だった。

これまでずっと俺を縛りつづけてきたものが一瞬でなくなった。

俺はどうすればいいのか分からなくなる。

俺は保護対象という形で王国が身柄を預かることになった。

特に処罰されることはない。

けど、家族も失い、故郷もなく、世界のこともわからない。

夢も希望もなくて、どうやって生きていけばいいのかわからなかった。

そんな時、少女が俺に提案をしてきた。

冒険者になれば——と。

聞けばこの世界、魔族なるものがあるらしい。

冒険者は魔族を討伐したり、ギルドでの依頼を受けたりして生活していくそうさ。

あてもなかつた俺は冒険者として生きていくことにした。

できれば二度と人を殺したくはない。

平和に生きたい。

そう思いながら俺はギルドに足を運ぶのだった。

あれ？いつのまにか勇者パーティ入り!?

現在、俺は一人の男から迫られていた。異世界——もとい日本から召喚された、所謂勇者と呼ばれている黒髪の青年だ。

「クロエがいてくれたら助かるんだ。クロエは小さいし小回りが効くから。今の勇者パーティには火力重視の奴しかいない。だからできれば勇者パーティに入って欲しい」俺だつて勇者。パーティには憧れてる。

魔王討伐を達成したら世界の英雄だなんて言われて褒め称えられるわけだし、これからの生活にも困らないだろう。

何より俺は昔から修羅場をくぐつてきている。実力は他の冒険者と比べても中々なものだ。

ここまでなら断る理由は一つとしてないだろう。戦うのが怖いとかそんな理由があればまた別だが、俺は別段そう思ったことはない。暗殺よりも精神的にずっと楽だからな。

ただ俺ははっきり言つて

「むり」

「はあ!?!どうして断るのよー!」

勇者の隣に立つ赤髪ツインテールの巨乳ツンデレ女が話す。

いや、お前だよお前。正確には「お前ら」のせいでそのパーティに入る気がしないんだよ。

別にパーティメンバーの人格に問題があるとかじゃない。

少し個性的だが全然良い人達だと思う。ただ……………

「はわわっセリカさん落ち着いてください!」

「ユウトのお誘いを断るなんて不思議な子だねえ」

「これでライバルが増えずに済んだ……………」

「えー!私はクロエちゃんと一緒に旅がしたかったのになあ」

ハーレムパーティは嫌だあああああ!

なんだこのテンプレ!?

金髪巨乳聖女にツンデレ、

紫色の髪が肩にかかるくらいまでに切り揃えられているボクっ娘お姉さんに、

胸こそないが身長が小さくて可愛らしい見た目をした銀髪寡黙っ娘。

とどめはこの国のお姫様であるアンジエ様

美女が集うその光景はまさしく楽園……………!

真ん中に男さえいなければな！

なんだなんだこの差……

俺は今まで血液に塗れた生活をしてきたのに、こいつらは色欲に塗れた生活を送つてやがった！

まあここまではないにしろ

女にモテまくる男つてのは俺の前世にもいた……と思う。記憶があやふやで思い出せない部分はあるが、確かにいた。だから別にハーレム築いてるのは良い。良いんだ。

だけど俺には絶対に譲れない要素がある。

もちろん精神が男だからいくら体は女とはいえ女性だらけの輪に入りにくいというものもある。でも一番の問題はそれじゃない。

俺は前世で聞いたことのある単語がある。

メス堕ち……言葉通りメスに堕ちること……メスになることを表す言葉だ。

俺は一度だけ、うろ覚えではあるが前世で俺と似たような境遇になっている奴が主人

公の作品を読んだことがある。

内容は今の俺のようにTS転生して勇者と共に戦っていくうちに段々と勇者に心惹かれていつて………という内容だったはずだ。

……考えただけでも恐ろしい。

俺が男に恋するだなんて。

別に男同士の恋愛がダメだと言ってるんじゃない。

ただ俺自身が男に惚れるなんて到底考えることができないだけだ。

(勇者パーティに入ったらメス落ちするかもしれないー)

そんな不安が俺にはある。現に目の前にいる5人の魅力的な女性達は全員勇者ことユウトくんにご執心だ。

あんなもの見せられたら嫌いでも好きになってしまおうのではないかと思うのも無理はない。

そういうわけで俺は勇者パーティに入るのを拒んでいた。

ただ、一切関わりを持たないというわけではない。

依頼を受けていった場所にたまたま勇者パーティが通りかかって少し協力して魔物を討伐したり、

王都の街中で金髪巨乳聖女さんことエレナさんにばったり会って一緒に買い物した

り、

王都で迷った時に紫髪のボクっ娘お姉さんのカカエさんに道案内してもらったり、銀髪寡黙っ娘ことマコちゃんと伝説の剣（偽物）を巡って争ったりした。

とまあなんだかんだで勇者パーティとは仲良くやっているわけだ。

勇者のユウトくんとは基本にお近づきになりたくないが、ユウトくんを囲っている5人のヒロインズとの交流は個人的に楽しいししていきたいと思ってる。

そういえばさつきから6人で何か話し合ってるな……まあ俺の勧誘に失敗したし、次の魔物討伐作戦の作戦会議でもしてるんだろ。

思えば勇者パーティとの出会いは王城だったな。

急に冒険者が王城に集められたんだよな。

王様が魔王討伐すつぞ！とか言い出した時には何言ってるんだこいつって思ったものだ。何せ魔王の根城である魔王城の周りには闇の魔術障壁が張ってあるもんだから、勇者がいらないと入ることすらできないんだよな。

当時は勇者が出現していなかったから、とうとう気が触れてしまったのかと思っただの。

だって王様クツソ若いからなあ……前世でいうところの高校生くらいの年齢だ。

そんな年齢で国の最高責任者になったら俺なら気が狂うね。間違いない。

まあ流石に気が狂った王様を放置するのは可哀想なので、今の時代には勇者はいないので魔王城にお邪魔することすらできませんよと軽く伝えたら、居ないなら呼べば良いのだ!とか叫びながら玉座から飛び出していったもんだからあれはもうダメだなって思ってた。

次の瞬間には王様が飛び出していった方向から真っ白な光の柱が立つたものだから本当にびつくりした。

気づけばそこには黒髪の日本人の青年が立っていて……って感じの流れだったな。

と、物思いに耽っていると話し合いをして何かを決めたららしい勇者パーティ御一行が俺に視線を向けてきている。どうしたんだ?また勧誘か?

「勇者パーティの話なら断ったんだけど……まだ何かある?」

俺が口を開くと、アンジェが唐突に声高々に宣言した。

「クロエ! 貴女を勇者パーティの一員に任命します! これは王族からの命令であり、拒否権はありません!」

……………

え…………?



はい……………?

え……………

は……………

「はああああああああああああああああ!!?」

「普段出さないような声出てるよクロエちゃん。やっぱり本当は勇者パーティに入りたかったんじゃないの?」

なんでそうなる!? 待つて本当に唐突すぎる…え、なんで?

「ボクの目にはいきなり勇者パーティに入れだなんて命令されて困惑しているようにしか見えないけど?」

そうです! その通りですカカエねえさん!

「ふんつ、べ、べつにパーティに入ってくれて嬉しいだなんて、お、思っていないんだからね!!」

テンプレやめろおおお! まず入るなんて一言も言っていないからね!?

いや王族の命令とか言われたら入らざるを得ないんだけども!

「ふつ……………流石は我が好敵手……………アンジエが強制的にパーティ入りをさせることを想定して……………あえて誘いに乗らないとは……………やられた……………」

君の中で俺は一体どういう存在になってるの……………?

君俺がパーティに入るの反対してなかった?

てかそんなキャラだったっけ?

もつと大人しくなかった……? そういえば伝説の剣(偽物)を取り合った時も……

『これが伝説の剣! 漆黒に輝く剣先を見れば、人々が魅了されるのも致し方なし!

これがあれば私の常闇の秘術・深淵「ジ・アビス」も更なる進化を……ボソボソ』

そういえばなんかボソボソ言ってたな……ていうか伝説の剣(偽物)を巡って争ったときからこんなキャラだったのか……

銀髪寡黙っ娘から厨二ロリっ娘に変更しておこう。

「これからよろしく。クロエ」

そう言つて手を差し出してくる勇者ことユウトくん。

もう俺が勇者パーティに入ることは決定事項なのかよ……。

あとエレナさん……俺現実ではわわって使う人初めて見たよ。

いや、可愛いけどね。本当に素ではわわって言うてるし、ぶりっ子してるわけじゃない。本当に天然って感じがして俺的にはものすごく好きなんだけどもね。

だから良いと思うよ。かわいいはせいぎ。

………いやいくらなんでもはわわっ多用しすぎじゃない？  
もう10回以上は言ってるよ!?

# ちびどらごんはかあいい

「クロエー！そっちに行つたー！捕獲頼むー！」

「はあ………なんでこうなつたのやら……」

クロエは現在勇者パーティにて初めての依頼をこなしていた。

なんでも家から逃走して逃げ出したペットを捕獲して欲しいらしい。

まあ別にそこまではいい。よくあることだ。

しかし

「逃げ出したペットがドラゴンで……」

そう。逃げ出したペットとはなんとドラゴンのことだったのだ。

ドラゴンとは言つてもまだ未成熟でクロエの身長半分ほどしかないが、それでも一般人はドラゴンをペットにしたりなんかはしない。

優斗は召喚されてまだ2年しかこの世界で過ごしてないからか、ドラゴンを飼うということの異常性を分かつていないらしい。

それもそうだろう。優斗はドラゴン討伐も何度か達成している。それも単独で。いや頭おかしい。勇者つて皆そうなの？

「きゅー！」

「よ〜ちよ〜ち怖くないでちゅよ〜」

ドラゴンが怯えていたので、安心させるために腰を低くして猫撫で声でドラゴンを落ち着かせようとする。

ー。かわいい。

普通に可愛い。いやこれが何十メートルもある巨体に成長すると考えるとちよつとアレだけど、可愛い。

「クロエってあんな声出せるのね……」

「クロエちゃんも可愛いところがあるんだね〜」

「なんだあの情けない姿は……それでも私のライバルか……?」

各々に好き放題に言われるクロエだったが、ドラゴンを宥めるのに夢中で気付いていない。

しばらくするとクロエ達のいるところに遅れて優斗とカカエがやってきた。

「悪い。ちよつとおくれた」

「ボクとしてはもう少しユウトと一緒にでもよかつたんだけどね?」

冗談っぽくカカエが言うが、本音である。

ちなみに優斗と二人きりの時に優斗に「疲労回復のポーションだよ」と言って媚薬入

りのポーションを飲ませようとしていたが、たまたま合流したエレナに「そのポーション、ちよつと借ります！」と言われて強奪されてしまったのだ。

エレナが何故ポーションを取ったかと言うと、傷ついている動物を見つけ、なんとかして助けてあげたかったかららしい。ちなみにポーションを飲んだ動物はすぐに元気になった。体力とともに性欲も湧いて来たようだったが、エレナにはそんなことはわかるまい。

また、エレナ以外は全員合流できたが、エレナはペットのドラゴンが見つかったことに気づいていないため、未だに他の場所を探している。

「クロエもそんな顔でできるんだな……よかった」

優斗がクロエのことを気にかけている様子を見て女性陣のクロエのことを見る目が暖かいものから冷たいものへと変化していくが、当の本人はドラゴンに夢中で視線には気づかない。それどころか「もふもふもいいけどこの冷たい鱗の感触もサイコー！」と呑気にブツブツ呟いている。

「まあとりあえず目的のドラゴンは保護できたわけだし、ボク達も王都に帰ろうか」「そうですね」

「承知した……私のライバルの様子もおかしいようだし……早めに帰らねば……」

「了解です。ドラゴンはクロエちゃんに任せる感じでいいかな？」

「そうだな」

「もう帰るの？わかった。ドラゴンは私に任せて」

各々が撤退する準備を進めていく。

クロエもドラゴンと戯れるのはやめて支度に取り掛かり始めた。

「あれ？でも誰か忘れてるようn」  
「そういえば依頼主って誰なの？ドラゴン飼うってよっぽどよ」

アンジエが何か言おうとしていたが、セリカの台詞によって遮られる。

結局アンジエは何を言おうとしたのか忘れてしまったが、忘れてしまうくらいのことだ。大したことではないのだろう。

「ああ…依頼主なんだが……ユリウスのことなんだ」

「あー。納得したわ。相変わらず優斗と同じでぶっ飛んでるわね…」

「ドラゴンをペットに……かっこいい……ふふっ……私もいつか……」

ユリウスとは優斗と同じ勇者で、金髪碧眼の青年だ。

そう、勇者は複数いる。

最初は優斗達が現在いる極東の国、ムレーハ王国で勇者召喚が行われ、優斗が召喚されたわけだが、他の国でもムレーハ王国に倣って勇者召喚が行われたのだ。

それぞれ北の国イームサ、西の国トスエウ、南の国イーツアで行われた。





ライブートでもかなり深い関係だ。ただ、結構曲者だったので、南の勇者もてつきり曲者なのかと思っていたが。

(めっちゃまともそうな人だな……)

「そうだ。せっかくだし僕のパーティ仲間も紹介するよ。皆！ ちよつと来てくれ！」

ユリウスがそう言うのと奥から女性が二人、男性が一人出てきた。

「おつ、優斗じゃねーか。元氣してたか〜！」

「あ、ガリウスさん、お久しぶりです。あ、紹介します。昨日俺達のパーティに入ったクロエです」

「ほお！ このちっこいのか。俺はガリウス。よろしくな！」

「あ、私も！ 私も！ 私はキーナ！ よろしくねクロエちゃん！」

「私はキーナ。よろしくね」

ガリウスは筋肉が逞しい屈強な男。

キーナとキーナはオレンジ色の髪をした活発な少女と冷静そうな少女だ。

双子なのだろうか？ 顔がとても似ている。

「はじめまして。クロエです。一応、元暗殺者です。よろしく」

「暗殺者!? へーなんか強そう！」

「強いとかそういうのじゃないと思う」

「せっかく南の勇者一行と東の勇者一行が揃ったんだ。何か催してもせぬか？」

ガリウスがそう提案してくる。

結局この日はユリウス率いる南の勇者一行と優斗率いる東の勇者一行で食事をする  
ことになり、各々で食事を楽しむことになった。

ちょうど10人席が空いていたので、全員で同じ席で夕食を食べることができた。

ガリウスが優斗とユリウスに酒を飲ませまくったり（異世界では15歳から飲酒が可  
能）

、その光景を見たマコが感化されて酒を飲もうとしたところをアンジエとセリカに止  
められたり、カカエ姉さんが謎の薬を優斗の飲んでる酒に入れようとしているのを  
キーナとケーナが止めたりと、中々カオスな状態だったが、異世界にきて初めて複数人  
で騒いだので、それなりに楽しかった。

その後は優斗とユリウスが酔い潰れてしまった為、各自パーティごとに解散というこ  
とになった。ちなみに誰が優斗を背負うのかで言い争いが生じたが、結局カカエ姉さん  
が背負うことになった。

「あー楽しかったー！ クロエちゃんはどうかだった？」

「うん。私も楽しかった」

「そっか。やっぱり無理矢理私がパーティに入れてよかったのかもね」

「そう…かな…?」

「うん。だってクロエちゃん、ソロで活動してた時よりもキラキラしてたよ」

「そう…なんだ」

自分では気付かなかったが、どうやらパーティに入る前はあまり元気そうではなかったらしい。自分ではそうは思っていないかったのだが、案外人肌を求めていたのかもしれない。

「そっか。そうなんだ」

胸の中に暖かいものを感じる。

前世にはあったが今世ではまだ感じたことがなかった人との触れ合いの暖かさだ。

「ありがとうアンジェ。私を誘ってくれて」

「どういたしまして。あつ、でも優斗さんには惚れないでね? いや、その…パーティ内

恋愛は良くないと思うから!」

「安心して、優斗に特別な感情なんてないよ。それに友達の好きな人を寝取る趣味はな

い」

「友達…! つてその前に私は別に優斗さんのことが好きだなんて一度も…!」

「顔見れば分かる。ていうかこのパーティほとんど全員優斗に惚れてると思うけど…」

「違う?」

「うっ、クロエちゃんにバレていたなんて……恥ずかしい……」

しばらくアンジエと会話を交わす。話している途中でマコが「私のライバルが他の女と話してる……はっ！これがNTRというやつか!」と訳の分からないことを呟き出したり、セリカが「重いでしょ？交代するよ？」とカカエ姉さんから優斗を引き離そうとしていたりしていた。

「本当に今日は楽しかったな。勇者パーティなんて入りたくないって思ってたけど、案外悪くないかも」

本気でそう思う。

勇者パーティに所属する6人はとてもいい人達だ。

………ん？6人？

えーと今隣で話してるアンジエと、後ろを歩いている優斗とカカエ姉さんにセリカ。それにさつきからブツブツ呟いてるマコ。あれ？残り一人は………俺か。うん。6人だな。あれ？でもなんかモヤモヤするんだよな………誰か忘れてるような………

「まあいつか」

「クロエちゃん？ どうしたの？」

「んーん。なんでもない」

「これからも平和に過ごせますように。」

そう願うクロエだった。

「はわわっ……っ……っ……っ……っ……どこですか……っ……っ？」

依頼にはなかったが、この後無事、エレナは保護された。

## BLと精神的BLは別物である（真理）

北の国イームサにある喫茶店 *true loves* 。略してTS喫茶と呼ばれる喫茶は今日も賑わっていた。

元々若い男女に人気のお洒落な喫茶店で賑わっていたのだが、最近は冒険者（というよりどちらかという勇者）の活躍が凄まじく、街自体が発展していつているのだ。

最近は若者だけでなく、老夫婦などにも人気の喫茶店になっている。

そしてクロエはその喫茶店で待ち合わせをしていた。

基本的に東の国から北の国へ行くのにはそれなりに時間がかかるのだが、これまた勇者の活躍によって高速移動できる魔法が発明され、現在は魔動車と呼ばれる特別な乗り物に乗ることによって、一瞬で国家間の移動が可能になっている。

まあもちろん乗るのにはそれなりに値段がかかるが、クロエはこれでも結構稼いでいる方の冒険者である。大金持ちとまではいかないが、小金持ちを名乗ってもいいくらいには稼いでいた。

「久しぶり、クロエ。元気してた？」

「久しぶりノエル。元気してるよ。なぜか勇者パーティに入ることになったんだけど

…

クロエと言葉を交わすのは、ノエルⅡエヴェリーナという少女だ。

彼女は北の勇者と呼ばれていて、呼び名の通り北の国イームサの勇者だ。

容姿は銀髪に金のメッシュが入った髪に、スレンダーで筋肉質でもある肉体が特徴的な超美少女だ。

ちなみに先日のユリウスもそうなのだが、ノエルはこの世界出身の人間ではない。

優斗と同様に他の世界から召喚された勇者だ。

といっても優斗と同じように地球の、それも日本から召喚されたわけではなく、それぞれが違う世界から召喚された勇者なのだが。

「本当？ 夜寝れてる？」

ちなみにノエルはクロエの前世について話してある。

後、この世界に生まれたときの境遇も。ノエルにはソロの冒険者として活動していた時、北の国での任務では毎回一緒に臨時パーティを組んで依頼をこなしていたため、結構仲はいいのだ。

「うん。最近は大丈夫。というか勇者パーティに入ったことについては特になんの反応もなしなの？」

「優斗から聞いてたからさ。私はクロエとならパーティ組んでもいいかなって思ってた

「ただ、先越されちゃったね」

「いつの間に優斗と連絡を取っていたのだろうか。最近優斗が北の国へ出かけた様子はなかったから、多分直接会いに行ったのではなく、魔伝導機器を使ったのだろう。魔伝導機器は遠く離れている相手と通話することができる機器だ。前世の世界という携帯電話みたいなものだ。もちろんこれも勇者の活躍によって作られたものである。例に漏れず高価ではあるが、ノエルは北の勇者だ。稼いでいるだろうし魔伝導機器を持っていたもおかしくはない。」

「そうだったんだ。絶対にパーティは組まないって言ったのに意外だね」

「いや別に絶対組まないってわけじゃなくてさ。まず男はダメでしょ？」

「一応俺男だよ？」

「今は女の子じゃない」

「そうだけど、って優斗はいいの？」

「んー優斗のことは男の人って感じで見てないからね。尊敬はしてるけど。ていうかいつの間に名前呼びになったの？もしかして関係深まっちゃった？」

「そんなんじゃないよ。俺元男だし。」

普段は一人称を私にしているが、ノエルの前ではクロエの一人称は俺である。

この世界にTS転生したときはショックな出来事があったため前世の記憶に蓋



がされているような状態だったが、ノエルと言葉を交わしているうちに段々と前世の記憶を思い出してきたのだ。

まあその勢いでノエルには元男であることを伝えているわけだが、ノエルには男として見られていなさそうだ。

そうしてしばらく何気ない会話を続けていたのだが、突如ノエルがこう尋ねてきた。

「あ、そういえばメス堕ちはしちゃったの？」

ブフオつとクロエは思わず吹き出す。

「してないしてない！ 大体俺は男も女も好きになれないし」

自身の性自認が曖昧なせい、クロエには男女問わず恋愛ができる気がしなかった。もちろん今世では色々今今の自分は女だと実感することが多くかった。

ちなみに例の日もきた。その、あれだ、まあ、そういう日はノエルに手伝ってもらった。

意外とショックは受けなかった。びっくりはしたけど。

まあなんかまだ軽い方らしいし。いや、普通に辛かったけども。

「ふーん。ハーレムパーティー入りしたのにまだメス堕ちしてないの？」

「なんでハーレムパーティー入りしたらメス堕ちしなきゃいけないみたいな言い方されな

きやいけないの?」

ノエルはどうやら前世(?)でT Sモノの作品を読み漁っていたらしく、なんでも元々B Lが好きだったそうだが、その過程で精神的B Lというジャンルを知り、T Sモノに心を惹かれたらしい。

そういうわけで、ノエルとの仲はいいのだが、そういう関連の話になると絶対にクロエにメス堕ちを期待してくるので、クロエは正直煩わしいと思っていた節もある。

というか結構深刻な表情で、「前世男だったんだ」って言ったら指差しながら「T S娘だ!!」って叫んできたの未だに覚えてるからな。

ちなみに言語が違うのでは? という話だが、まあ勇者特典というやつで普通に会話ができるようになるらしい。

「メス堕ちさせるにはどうすればいいかな?」

「それはメス堕ちさせたい相手に聞く質問じゃないね」

「別に私がメス堕ちさせるわけじゃないし?」

「じゃあなんでそんな質問するんだよ……」

どうしてノエルはこうもメス堕ちさせたがるのか、コレガワカラナイ。

てかT SモノじゃなくてB L読めよ。なんでT Sモノに手出したんだよ。

「B Lもいいけどさ、T Sモノってやっぱりファンタジーって感じじゃない?」

そこがいいのよ。BLもBLでいいんだけど、BLモノ読んでたとき、知り合いの男の子同士の子を見て、脳内で勝手にカップリングさせちゃったりしたことがあったんだけど、その時に私ニヤッテンダーって感じで彼らに罪悪感が湧いたんだけど、TSだったらそれ、基本当てはまらないじゃない？ だって性自認が女だからっていう理由で体が男から女になるっていうのは、心の性別は女なわけだし、実際にTS娘みたいな状況の人はいないでしょ？ だからいいの」

オタク特有の早口でノエルがペラペラと語る。

ていうかこの話10回目くらいだし、聞くたびに貴女の目の前にいるの、TS娘ですが何か？ って言いたくなる。それにノエルのいかにも美少女って感じの容姿でこれ言うの、ちよつと知らない人が聞いたら幻滅されるというか、美人が台無しというか。

後、ナチュラルに心読んでくるな。

「ていうか、その知り合いの男の子達を脳内でカップリングさせたことには罪悪感感じてるのに俺を優斗とカップリングさせようとしてることに罪悪感湧かないわけ？」

「それとこれとはまた別じゃない。クロエのはカップリングっていうか恋バナ的な感じで話してるつもりだし」

「そんなに恋バナしたいなら自分の恋愛進めればいいのに」

「あー無理。私男の人苦手なんだよね」

「俺元男だけど…?」

「それ前世の話でしょ。今女の子だしノープロブレム」

本当に不思議だ。何故B L好きなのに男が苦手なのか。

あれだろうか、神聖な男同士の恋愛に女が挟まっではいけない！とかそんな感じなんだろうか。いや違うな。だったらTSモノなんて読まないしそもそもこんなにメス堕ちさせようとしてこない。

「あつそうだ！」

「え、なに？」

「クロエ、私と話す時、一人称『俺』じゃなくて『私』にしてくれない？」

メス堕ちの話を話しているようだ。

「えーやだよ」

「『あたい』とかでもいいわよ」

「もつとやだ」

突然名案を思いついた！ みたいな顔を شدしたから何かと思ったのだが…：そんなことて閃いた！ みたいな顔をしないでいただきたい。いや本当に。

「なんで〜？ いいじゃん普段『私』って言うてるんだし」

「普段はね。でも一人称『俺』にできるの、ノエルの前だけなんだよね。だから、ノエル

の前でだけは「俺」でいさせてほしい」

クロエがそう言うのと何故かノエルがグハッ！ と奇声を上げた。どしたん？

「どしたん？」

声に出すつもりがなかったのだが、驚きすぎて普通に声に出た。

「いや……ふいうちっていうか………急なデレ要素に心を打たれちゃって…」

「まあ、ノエルのこととは大切な友達だと思ってるから、その…ね」

「おいうち……だと……?!」

もうやめて！ ノエルのライフはもう0よ！

「あーこんなこと言われたらときめいちゃうよ〜」

「ノエルって女の子もいけるの？」

「……………いけるかも」

なんだ今の間

「ちよ、ちよつと待って、あの、その、わたくしはそういう趣味はございませんわよ?」

「待ってクロエ！ 別にないから！ そういうのないから!」

「だだだ大丈夫ですわ……」

「全然大丈夫じゃないじゃん！ 動揺してるよ声!?! 動揺しすぎてお嬢様口調になつて

るよ!?!」

「だ、大丈夫。お、落ち着いたから……」

「待って本当に違う！ 違うからね!？」

「じゃああの妙な間はなんだったの……？」

「……………」

「え？ ちょっと何か言つてよ！ え？ 本当なの？ 本当に女の子もイケやうかんじ

なの!？」

「どうなんだろう……」

「え……？」

「……………いや〜なんか、優斗のパーティーメンバーのエレナちゃんとかならワンチャン

……………」

「あ、そう……」

ガチなんだ……とクロエは戦慄したが、エレナとクロエではタイプが違う。というこ  
とはクロエはノエルの守備範囲外だろうし、とりあえず身は安全そうだ。

「あつ、でもマコちゃんもイケるかも……？」

前言撤回。

「ちよ、俺は食べても美味しくないよー!」

「大丈夫だから！ クロエは友達だから!! そういうのじゃないから!!」

「そ、そうだよね！ 友達だもんね！ そういうのじゃないよね！」

「うんうん！ そう！ 友達！ マイベストフレンド！」

ふう。とりあえず貞操の危機は免れたか。

「まあでもT S娘は性癖に刺さるわね……」

「ノエルさん!?!」

「あ、待って！ 待って！ 本当に違う！ 違うから！ ねえ後退りしないで！ 本当  
にそういうのじゃないからー！」

クロエとノエルの攻防はしばらく続いた。

## 浮気はやられてもやるな

「クロエちゃん！ 今度こそ俺とパーティ組まない？ あつ、もちろんノエルちゃんと

「もう組んだ」 一緒でもいいからさ……………は……………」

「今なんて」

「もう組んだ」

「も、もつかい言つて？」

「もう組んだ」

「はあああああ!!? 嘘だろおおおお!!?」

「いやホント」

このうるさい男の名はアルトIIゲスイヤー。

西の国トスエウに召喚された西の勇者で、クロエのことをしつこくパーティ勧誘してくる男でもある。「俺はハーレムパーティを築くんだけ」なんて言つてソロで活動して女性を片っ端から勧誘している男だ。女性の間では下心丸出し男として知られ、新人冒険者でもその名を知るほど（勇者であるということと認知度が高いせいでもある）であり、女性を勧誘するたびに「キモい。しね」「あつ、こんなところにゴミが落ちてます





て女性達を侍らせて来たんだな!? 許せねえ!!!」

「いや別にそんなこと言つてな「クロエちゃん! 俺と一緒にあのクソ勇者に直談判しに行つてやるよ!」い……」

この男、多分自分に都合のいい情報しか耳に入らないようになってると思う。

「あのとこでばあさんや」

「どうしたのかねじいさん」

「ノリいいねクロエちゃん。そういうところ好きだよ」

「アツハイソウデスカ」

好きだとかどうしてこうも軽々しく言えるのだろうか。チャライぞ。

ていうか質問したかったんじゃないのか。

「んで聞きたいことがあるんだけど」

「何なりとどうぞじいさん」

「あついやそのノリはもう大丈夫だよ。あの、エレナさんとかつて実際あのクソ勇……優斗君のことどう思つてるのかな?」

もうほぼ聞こえてるしさつきまでクソ勇者つて呼んでたんだから今更呼び方を変える必要はないだろうに。わざわざ呼び方を変える必要があつたんだろうか。

いや多分こいつなりに女の子に嫌われないように努力してるんだろうな。

……なんか可哀想に思えてきた。

「エレナさん達が優斗のことどう思ってるか……？ 本人達から直接聞いた方がいいと思う。それに私が勝手に口にしていいことじゃないと思うし」

「そこをなんとか……！」

「そういう仕草しているとモテなくなるよ」

「くっ！ それでも俺は……！」

「しつこい。ていうか見てて分かるでしょ。好意ダダ漏れだし」

「うっ、まあそれは確かに……」

もしかしてこいつ、本気でハーレムパーティを作ろうと思ってるんだろうか。

多分一生叶わぬ夢だろうな。あつたとしても何かの間違いで精々一人が好いてくれるくらいなんじゃないだろうか。いや言い過ぎか。

「まあでもマコとかは優斗のことお兄ちゃんみたいに思ってる節があるから、多分優斗に惚れたりとかそういうのはないと思う」

「あーいや。マコちゃんね。うん」

この歯切れの悪さ、多分マコの本性を知ったんだろう。確かにあれを見るとマコを知らない人間からすれば関わりたくないと思うだろう。この世界には厨二病という概念がないから尚更だ。

「ところでクロエちゃんは……?」

「別に優斗のことはなんとも思っていないけど、だからといってアルトが好きだとかそんな感情も一切ないよ?」

「なるほど……! つまりまだ優斗のハーレム要員にはなりきってない……! チャンスはまだあるってことだな!」

「ないよ」

一見かなりポジティブに見えるこの男だが、こう見えてかなり病みやすい。

いや本気でハーレムパーティー作ろうと考えてる部分はどうかと思うが、正直凹んでるところを見ると可哀想になってくるのだ。クロエとしては元男なこともあって同意できる部分はあるし、アルトのことは言う程嫌いじゃない。ノエルは嫌っているが。

「後はノエルちゃんか……他の女の子は俺のことゴミを見るような目で見てるけど、あの子はちよつと違うんだよね。対応も優しいし、勧誘したらパーティーに入ってくれるかな……?」

「あはは……まあがんばえー」

ノエルがアルトのことを嫌っているなんて言えば、間違いなくこの男は発狂するし、多分また病む。それに、ノエルだってアルトと良好な関係を築き続けているのだ。いくら内心では嫌っているとはいえ、それをクロエが告げ口してノエルとアルトの関係を破

壊するのは良くないだろう。なのでクロエは適当に誤魔化した。  
「クロエちゃん……」

急にアルトが真剣な表情になり、俺の手を包み込む。

え？ なにこれ？

「俺と……結婚を前提にお付き合いしませんか!？」

………んー？

あー………

え？

あ……

「うええええええええ!？」

「へ、返事は今じゃなくていいから!」

「え!?! 本当に求婚されてるのこれ!?!」

「前からずっと思ってたんだよね……俺女の子に嫌われてるけど、クロエちゃんだけは俺に優しくしてくれるし……」

いつの間に俺はこいつを攻略してたんだ。

いや、男の頃の癖でつい距離感掴めずにアルトと接していたけど、普通女の子から嫌われてる男に、嫌わないでまともに接してくれる女の子が近づいてきたら、そりやそうなるよね。

……どうやら俺はいつのまにかオタクに優しいギャル的な存在になってしまっていたらしい。

「お、お断りさせていただきまふっ！」

ちよつと噛んだ！ けどちゃんとお断りの返事をしたぞ！

「そんな！ 先つちよだけ！ 先つちよだけお付き合いさせて！」

「先つちよだけお付き合いってどういうこと!?!」

「お、お試してお付き合いとか……?」

「じゃあ最初からそう言えよお！」

しばらく騒いでいると、周りの人からチラチラ見られ出して恥ずかしくなったため、2人は近くにあった店に避難することにした。



「その……本当に真剣に考えて欲しいんだけど……」

そう言うアルトの表情は真剣そのものだ。

しかし、クロエとしては誑かすつもりはなかった。

それに、元男だという話を彼にはまだしていない。

仮に告白を受け入れて付き合うにしても、その部分を彼に明かさないのは彼に対して誠実とはいえないだろう。

「あの、告白してくれたのは嬉しい。けど、付き合うのは……ごめん」  
「うん」

アルトは真剣に聞いてくれている。段々と申し訳なくなってくるが、ここで折れて中途半端に付き合う方が彼に失礼だろう。

振るならハッキリと振ってあげるべきだ。

「その、この話は……誰にも内緒にしてほしい話なんだけど……その、まだノエルにか話してないから」





うかという部分は心配だが。

「まあ……がんばって」

「なんでそんなに微妙そうな反応なの？ 前みたいに慰めてくれよ」

「凹む原因を作った相手に慰めを求めるのはどうなの……？」

「あ、そうそう。俺がクロエちゃんに告白したこと、ノエルちゃんには内緒にしててね！」

「あーうん。わかった」

「あ、念の為に聞くけど、ノエルちゃんは元男とかじゃないよね……？」

「そういうデリケートな問題ってあまり詮索しない方がいいと思うんだけど……。まあ、

ノエルは元から女の子だよ。私、ああいや、俺が保証する」

「そっか！ よし、早速デートのプランをねるぞー！」

「ここまで行くとかわいそうに思えてくるが、仕方がない。彼はしばらく女性関係に苦労することになるだろうが。」

（まあ、なんだかんだで楽しそうだし、いつか）

# 羅針暗黒魔劍ドラゴンツヴァイ・グレードインフィニティ

「はっはっはっはっは！ また開発してしまった！ これぞ究極の闇！ 名付けて『常闇の秘術・深淵（ジ・アビス）』睥睨する闇夜く深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているく』完成だ！」

目の前で銀髪厨二病系ロリっ娘が騒いでいるが、俺はどうすればいいのだろうか。

北の国イームサ、西の国トスエウに顔を出した後、東の国ムレーハに帰ったのだが、帰宅してすぐに勇者パーティで魔王軍の視察に行くことになったのだ。

魔王の領土は北の国イームサのさらに奥にある広大な雪原全てであるため、現在は北の国イームサの中の辺境の村、ドルーコ村で宿を取っていた。

「刹那に幻想を抱き暗黒竜よ、その眼を持って、この空虚な世界を正したまへ！ 我、白夜の真虎なり。氷雪の大地にて古くから君臨せしー違う、もつとカツコよく……」  
宿を取るにあたって、流石に男である優斗と、その他女性を同じ部屋に入れるのはまじい。3つほど部屋を取ることにしたのだが、クロエはマコと相部屋することに

なった。一応アンジェも相部屋なのだが、彼女は現在優斗達と共に買い物に出掛けている。よつて今この宿にはクロエとマコしかない。

「愚か、浅はか、惨めなり。総て蠱毒の贄、この世の理ここにあり——違う……あんなり人をバカにするような言葉はよくない……」

誰が誰と相部屋になるのか決める際、アンジェとマコがクロエと同室がいい！ と即答してくれたのは素直に嬉しかった。

「アブソリユート・ダークネス・ビジョン！ これも違う！ カッコいい詠唱を……」  
嬉しかったのだけでも。

これどうしたらいいんですかね？

部屋入りたくても入れないんですけども！

「カモン！」

もしかしてドアの前で待ってるのがバレた!?

「暗黒竜！ 来い！ 我の元へ顕現せよ！」  
なんだ詠唱か。

とにかく、いつまでもこんな調子なので部屋に入ろうにも入れない。

というか飯に入ったとして、いつまでもこのテンションでいられたら困る。

いや、流石に人がいたら自重するよね……？

「秘術！ 『常闇の秘術・深淵〔ジ・アビス〕睥睨する闇夜く深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいている』 発動!! これが発動された時——」

いやないな。

こいつは自重しないな。

とうか一応この宿俺達の他にも泊まる人いるんだけど……もう少し近所迷惑とか考えない？

「Shut up!」

それ自分に対して言ってる……？

ていうかこの子本当に大丈夫なのだろうか。

「何か物足りないな……やっぱリ『アレ』をつけるべきか……」

今のところ優斗達がいる時は厨二病を表に出してないみたいだけど、そのうち眼帯とかし出しそうな勢いだ。

ん？ 何か鞆漁り出したな……何か小道具でも……あつ

「私の右目がっ！ 疼いてたまらないぜっ！」

もう既に持ってたよこの子。急に鞆漁り出したと思ったら眼帯取り出して装着し出したよこの子。

「最高っ！ やはりこの眼帯はよく馴染む……この感触を一言で表すなら……」

本当に俺の存在に気づいてないのかな。

詠唱の内容と俺の考えてることがマッチしすぎてるんだが……

「ベストマッチ！」

いや本当に心でも読んてるのかわつてくらのマッチ率！

マッチングアプリもびつくりのマッチング率なんだけど!?

これが思考盗聴ってやつですかい……



結局部屋に入れずに一時間経ってしまった。

部屋の扉の前で一時間ずつと棒立ち……しかもちよつと隙間空いてるから中でマコが厨二病の権能を思う存分奮っているのが見えてしまう。

入ればよかつたじゃないかという意見もわかるけど、正直入れる雰囲気じゃなかった。はつきりいうとちよつと頭にきている。

だからまあ……もういいだろう。

ガチャっ

「お邪魔します」

「その声は……………我が盟友にして至高のライバル…！ クロエではないか！」

山月記かな？

「ふっ、クロエよ。私は…いや我はまた完成させてしまった……究極の闇魔法……その名も『常闇の秘術・深淵』『ジ・アビス』睥睨する闇夜く深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞい…」

「ま、マコちゃん…？」

「え…？……………そ、その声は……………わ……………ア…アンジエ……………」

ということ、ずっと待たされて少しマコに苛立ちが溜まった俺は、マコの厨二病をアンジエに知らせるといふ形でマコに精神的ダメージを与えることにした。

俺が一時間部屋の前で棒立ちしているうちに優斗達の買物物が終わったからな。

今のマコはさながらオタクバレして恥ずかしい思いをしている思春期のアレ状態だ。

一時間も俺を待たせた罰だ。せいぜい苦しむがいい…………

「ま、マコちゃん！ か、かつこいと、思う、よ…？」

「うわあああああああ！」

「マコちゃん!? お、落ち着いて！ 大丈夫だから！」

「殺せっ！ 殺せえっ！ こんなっ！ こんな屈辱ううう！」

普段は寡黙なマコが声を上げて悶絶している。それを必死に宥めようとするアン

ジエ。これに懲りたら厨二病癖はもう少し抑えような！（悪魔のような笑み）

ん？ 何かバタバタ足音が聞こえてくるぞ……？ あつ

「マコ！ どうした！」

「マコ！ 大丈夫!?!」

「はわわっ！ ま、マコちゃん！ 大丈夫ですかー！」

「なんだか大変なことになってるみたいだねえ……」

騒ぎを聞きつけたのか、優斗、セリカ、エレナ、カカエが順にやってくる。

流石にパーティメンバー全員に厨二病バレするのは可哀想だったので、本当はアンジエだけのつもりだったんだが、マコが大声を上げたせいで予定外の4人が来てしまったみたいだ。

「み、みるなああああああああああああ！」

「ちよつと優斗！ あんまりジロジロ見るのやめなさいよ！ と、とりあえずマコのこととはエレナ達に任せて、ほ、ほら！ 下で一緒にお茶でも……」

「そうだよユウト。乙女の秘密を覗くのは例え勇者であっても許されることじゃない。ここはセリカ達に任せてボクと……」  
「はあ!? あんたが残りなさいよ!」……

セリカとカカエが優斗と2人きりでお茶する権利を奪い合っている。





セリカも流石に泣き叫んでたら心配はするんだね……

とかかカカエ姉さん薄情すぎない？ 人の心とかないんか……？

「うゝえ……ひっつぐっつ……ぐすん……」

やばい。ちよつと赤つ恥かかせようと思っただけなのにまさか泣き叫ぶなんて……

よくよく考えたら俺精神年齢マコよりも高い癖に……ちよつとイラついたからって14歳の女の子を泣かせるか？

やばい。本当にやばいことやってしまった。

「マコ……」

流石に可哀想だと思い、マコの元へ駆け寄りその小さな身体を抱きしめた。

「泣かないで……マコが悲しんでると、私も悲しいから」

「うゝうゝ………てゝもゝあゝんゝなゝのゝみゝらゝれゝたゝらゝみゝんゝなゝかゝらゝきゝらゝわゝれゝちゝやゝうゝ！」

今までは厨二病を患っているちよつとおかしな子だと思っていたが、彼女にも年相応なところはあるらしい。流石にいじめすぎたかな……

「大丈夫だから。皆マコのこと大切に思ってるし、そういうところもマコ的一面だから、きつと受け入れてくれるよ」

「ほゝんゝとゝ？」

マコがそう問うと、勇者パーティの面々はうんうんと頷いている。

いや、まあ多分アンジエ以外はマコの厨二病のこと分かってないだろうから元から嫌われる心配なんてしなくていいんだけども。

というかエレナさんはなんで顔真っ赤にして悶絶してるんだ？

「これが………尊いということですかっ！」

「とおとい……？」

あ………。

どうやら女の子同士で抱き合っている様子を見てそちらの方向に目醒めてしまったらしい。いやこのくらい軽いスキンシップの内だと思っただけ……。

まあエレナさん純情だしね、仕方ないね。

優斗君は尊いという言葉を知らないらしい。現代日本からの転生じゃないの？

「そっかあ！ よかっかあ！ よう………うう………」  
ZZZ

泣き疲れたのか、安心したからか、もしくはその両方か、マコはスヤスヤと寝息をたてた。

こうして見ると可愛いな、この子。

「結局何の騒ぎだったの？ まあ落ち着いたなら深くは追求しないけど……」

「ボク達は邪魔者だろうし、ここは2人きりにさせてあげようか」

「そうだな……」

「そうですね……」

そう言つてセリカ、カカエ、優斗、エレナの4人は出ていく。

気を遣つたのか、アンジエも4人と一緒に出ていった。

5人が出ていったせい、部屋ではマコの寢息だけが音を発している。

「……………zzzz……………んう……………」

「っー かわいい……」

普段の厨二病からは想像もできないほどの可愛い寝顔だ。

なんというか庇護欲を掻き立てられるような顔をしてる。

「あーでも俺のせいで泣かせちゃったんだよな……」

流星に今回の件はいくらなんでも大人気なかつたと思う。

やったことといえばアンジエを部屋に連れてきただけなのだが、それにしてもマコに与えられた精神的ダメージは相当なものだろうし、アンジエだってマコを泣かせてしまつて気不味い思いをしただろう。

「やっぱり精神が体に引つ張られてるのかな……………はあ……………」

結局この日はこれ以降ずっと1人反省会を繰り返したせいで中々寝付けないクロエ

であつた。

## m u s c l e X m u s c l e || m u s c l e

「ひやく……………じゆうなな……………ひやくじゆう……………はち……………」

目を覚ましたら厨二銀髪ロリっ娘が筋トレをした件。

どしたん急に。

やっぱり昨日のアレでおかしくなっちゃったのか。

「マコ…？ 何してるの？」

「ひやく……………じゆう……………きゆう……………ひやく……………にじゆう！ はあ……………これ…

？……………きんとれ……………はあ……………だよ……………はあ……………」

しかも回数が異常だ。

なんで100越え行ってるの…？

「なんで急に筋トレ……………？」

「ふっ……………私は……………はあ……………思った！……………はあ……………闇魔法は……………流石

に……………はあ……………恥ずかしい……………だから……………魔法じゃなくて……………筋肉

で……………はあ……………」

「息整えてからでいいよ?」

とかこの子一応ジヨブ盗賊だったはずなんだけど……。

魔法使ったり筋肉に頼り出したりと盗賊要素がどこにもない。

某人気RPGの転職できる神殿みたいな場所で転職したほうがいいと思うよ。

「クロエ……見てて!」

しばらくして息が整ったのか、はつきりとした声でマコはそう告げる。

そして拳を握り、手を振り上げ、次の瞬間……

ドゴオツ!

轟音が鳴り響く。

マコが拳を床に向けて放ったのだ。床には穴が空いて………はあ!?

深っ! 一階ぶち抜いてさらに下まで穴開いてるじゃん!?

どこでこんな腕力身につけた………?

ていうかこれ……弁償とかしないといけないやつやん……

「クオリア!! 何やつとんじゃさ!」

宿屋のおばちゃん!?

そりゃこんだけ大きな音出したら来るよねえ!

やばいやばい、謝罪しないと……!

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ その！ 宿！ あ、あの……！」  
パニックになって上手く言葉が紡げない。

まともに謝罪もできない……………ていうか優斗達は来ないのか…？

流石にこれだけ大きな物音出したんだから来て欲しいんだけど……

「おばさん、見て！」

そう言つてマコは再び拳を振り上げ……………

「つて！ やめろおおおおお！ これ以上問題を起こすなあああああ」

慌てて叫ぶが、もう遅い。

マコは既に拳を振り終え、そこには既に底の見えない深い穴ができていた。

マコ、昨日のアレでこわれちゃったの…？

これ俺のせい？ 俺がマコいじめたせい？

「ほお〜？」

宿屋のおばちゃんの目が好戦的になっている。

あ……………やばいやつだ……………

「クロエ、大丈夫。私の筋肉でおばさんも感動してるだけだから」

「んなわけ……………」

「はっはっはっはっは！ あんたすごい筋肉だね！





そんなふうにいるながらも宿屋から離れる。

あそこにいると何か大切なものを失う気がする。

具体的に何とは言えない……というか分からないが、あの狂気にはもう触れたくない。

と、しばらく村をブラブラしていると、エレナさんを見つけた。

「エレナさん！ はあ……疲れた。さつきマコの様子がおかしくてさ……」

「何？ クロエちゃん？ あっ！ もしかしてクロエちゃんも体を鍛えたいの……？  
だったらこのダンベルを使ったら……」

「お前もかあああああっああああああああああ!!!」

即座にエレナの元から全力ダッシュで離れる。

ていうかエレナさん追ってきてる!?

元気にダンベル持ち上げながら追ってきてる！

こわいこわいこわい！

てかエレナさんそんなに筋肉あつたの!?

本当にエレナさん本人なのか怪しいよこれ……

あっ！ 転んだ。

いや、ダンベル持ち上げるのはどうかと思うけど、あのドジさ加減はエレナさんらし

いな……………



とりあえずエレナさんはまいたか。

というか、走ってる途中でも村の中でダンベルを持つてる人とか、プロテインを持ち歩いてる人とか、いきなりその辺で筋トレ始める人とかいたし、どう考えてもおかしい。

もしかして俺がおかしいのか？

世界じゃなくて、俺が間違っているのか？

筋肉って実は素晴らしいモノナンジャ……

「クロエちゃん！」

この声は……

「アンジエ……？」

「プロテインも持つてない！ ダンベルも持つてない！ よかったあ。クロエちゃんは

「まとも」なんだね」



アンジエはまともなはずだ。

でも、なんだろう、この違和感……………

本当に着いて行って大丈夫なのか……………？

俺が悩んでいると、向こうの方から誰かが歩いてくる。

手には……………ダンベル……………？

まさか……………まずい！

咄嗟に逃げようとするが、アンジエに腕を掴まれて止められてしまう。

「ねえクロエちゃん。大丈夫だよ。私達は「まとも」だから……………だから安心して。クロ

エちゃんも「まとも」にしてあげる」

コツコツと足音を立てながら誰かが近づいてくる。

ダンベルを持ちながら歩いてきたのは……………

「ノ……………エル……………？」

北の国の勇者、ノエルⅡエヴェリーナだった。



優斗は現在、おかしくなった村の人達から逃れるため、村中を駆け回っていた。

「なんで村の人達はこんなになってるんだ……！　いくらなんでもおかしい……魔王軍の  
仕業か……？」

プロテインを持ちながら筋トレを勧めてくる村人達から逃げながら優斗は考えを巡  
らせる。

（マコもおかしくなってたし、エレナの様子もおかしかった。クロエ達は大丈夫か？）

あれこれと考えているが、先程からずっと走りっぱなしだ。

1人の村人にずっと追いかけられているのではなく、1人村人を撒けばまた別の村人  
が、その別の村人を撒けばその先にいるまた別の村人が追いかけてきて……と言った具  
合で中々休む暇がない。村人に危害を加えるわけにはいかないため、下手に戦闘もでき  
ない。

（そろそろ休みたいな……）

正直体も大分疲れてきている。

そろそろ休みたい、そう思っていると

「おい！ クソ勇者！ こっちだ！」

脇から男の声が聞こえてきた。

優斗は男の声に従い脇へと逸れていく。

村人達も優斗の後を追おうとするが、優斗が脇にそれた後、既に村人達は優斗の姿を見失っていた。

「悪い、助かった」

「礼なんて言うな。俺はお前が嫌いだ。ハーレム野郎」

「別に彼女達とはそういう仲じゃない。俺はアルトと仲良くしたいと思ってるんだけど、ダメか？」

「気持ち悪いこと言うな。俺はノーマルだ」

優斗を助けたのは西の勇者であるアルト・ゲスイヤーだった。

彼は優斗のことを嫌っていたのだが、流石に周りが皆おかしくなっている状況では、

1人では心細いと思った彼は、嫌いではあるが、まともではあるため、優斗を助けることにしたのだ。

「そういえばアルトはなんでこの村に来たんだ?」

「そりやお前、愛しのノエルちゃんを追っかけてに決まってるだろ……。ていうかお前、女と話す時と態度違うんだな。なんだ? お前のハーレムパーティーには男はいらねえってか!」

「それはアルトも同じだろ。女性に対する対応が変わることに関しては勘弁してほしい。流石に男友達みたいな気さくな関係っていうのは幼馴染ってわけでもないし難しいんだ。もちろん中にはそういう人もいるんだが……。まあやっぱり男友達とは感覚が違うんだ」

「そういやお前男友達とかいるのか?」

「……………いない……………な……………。一応ユリウスとは話をするが……………軽口を言い合えるような仲じゃない。アルトはいるのか?」

「いな……………あーいや、1人いるな。とっておきの男友達だ。でも俺は女にモテてるお前が羨ましいけどな!」

「そうか。俺も男友達が欲しいよ……………なあ……………良かったら……………俺と友達にならないか?」

「やだね……!!」

「ガツハツハ！ 勇者ともあろうものが男友達が欲しいと申すか！ よかろう！ ワシが友達になってやつても良いぞ！」

「!?!」

突然の第三者の声に、優斗とアルトの2人は戦闘体制に入る。

（いつからいた……？ 油断していたとはいえ、全く気付かなかった……）

「おい！ お前何者だ!?!」

アルトが問う。

視線の先には、身長2m強で巨体の大男が佇んでいる。

心なしか肌は紫がかっていて、頭の上には2本の角が生えている。

「ワシが何者か？ じゃとお？ 貴様、人に名を聞くときはまずは己から名乗るのが礼儀であろう。まあよい。ワシの名前はオニンニク。誇り高き魔王軍が“四天王”の1人じゃ！」



# 運動不足は身を滅ぼす

「ノ……エル……？」

おかしくなってしまったアンジエ達に捕まえられてしまったクロエは現在危機的状況に陥っていた。

(他の3人ならまだしも、流石にノエルから逃げるのは難しい……)

クロエは元々暗殺者だ。

だからこそ、気配を消すのに長けているし、隠密行動も得意だ。

一度アンジエ達から離れることができれば、確実に逃げることもできるだろう。

それも、勇者という規格外の化け物がいなければの話だが。

もちろん勇者にも強さには違いがある。

例えば西の国の勇者であるアルトは、努力をせずに女の尻ばかり追いかけているせいか、他の勇者と比べると少し弱い。

しかしそれでも尚、規格外の強さを持つのが勇者だ。

努力をあまりしていないアルトであっても、クロエは勝てることができないうだろう。

ましてや、努力家であるノエルとまともに戦うことなど不可能である。そもそも、元暗殺者だという特性上、クロエは正面からの真つ向勝負に強いわけではない。

基本的には毒殺や闇討ちなどで相手の息の根を止めるのを得意とするのが暗殺者だ。冒険者となった今でも、その頃の名残なのか、基本的な戦闘スタイルは不意打ちや騙し討ちだったりする。

ノエルが近づいてくる。

これからクロエもマコやエレナのような筋肉愛好家に変えられてしまうのだろうか。ノエルがクロエのすぐそばまで近づいてきた。

手を振り上げて、そのままうなじにかけて……………

ストンと手刀を振り落とした。

14歳の少女が気絶する。



「あのーノエルさんや、状況を……」

ノエルの超人的な身体能力のおかげでセリカとカカエを撒くことができたのだが、正直状況が全く掴めない。

「あーそれね。どうやらこの村、魔王軍に目を付けられたみたい」

「それと筋肉に何の関係が……」

「さあね。正直分かんないけど、村の人達は皆ダンベル持ったりプロテイン持ったりするのが当たり前って感じになってたから、とりあえず私もダンベル持ってたってだけ。ただ、今わかるのは村にいる人が今日からなぜか全員が筋肉に対してこだわりをもつように洗脳されたってこと」

「意味わからん……」

「私も意味分かんないわよ。急に筋肉だー筋肉だー言われても……ねえ」

「優斗はどうなんだろ……」

「勇者の力を持つていれば、洗脳されることはないから、多分優斗は大丈夫だと思うよ。あつ！もしかして……愛しの優斗君を心配してるのかな？」

「別に好きじゃないってば……」

正直クロエはこの状況に辟易としていたのだが、ノエルはそうではないようだ。

いつも通り軽口を叩く余裕があるらしい。

勇者だからだろうか。

「うーん。多分この規模の洗脳なら幹部クラスが1人出てきてる可能性があるのよね。『十拝臣』の1人くらいは来ててもおかしくないわね」

『十拝臣』とは魔王軍の將軍の中でも魔王が特に気に入っている10人の將軍の事だ。

魔王軍の四天王とはまた別の扱いであり、強さに関してはまばらで、一番弱い『十拝臣』から一番強い『十拝臣』までの差はかなり開いている。

『十拝臣』ってどれくらい強いのか？」

「さあ？ 私は戦ったことないもの。あつても優斗はもう既に3人撃破してるらしいわよ。まあ、また新たに補充されてる可能性はあるけどね」

「やっぱり優斗って強いんだなあ。ていうか幹部クラスを3人も撃破できるくらい勇者って強いのに、それが4人もいるってかなり鬼畜じゃない？」

「魔王軍からしたらたまたまつたもんじゃないわよね。まあこつちも魔王軍の戦力がわからないわけだし、仕方ないわよ。もしかしたら『十拝臣』が実はただの使い捨ての駒だったって展開もありえるかもしれないじゃない？」

実際人類側も魔王軍の戦力を把握しきれてはいないのだ。

お互いに探り合いながら戦っている。

諜報員なども送ることはある。



「うるせえ！ 俺に指示すんなハーレム勇者！」

「ガツハツハ！ お主ら勇者同士じゃろう？ 仲良うせんか！」

優斗とアルトの二人のコンビはバラバラで上手く連携できていない。

だからこそ、優斗はアルトに合わせるように言ったのだが、アルトは聞く耳持たず、がむしやらにオニンニクに特攻している。

「アルト！」

「ちっ！ 分かったよ！」

流石のアルトもこのままではまずいと悟ったのか、優斗のタイミングに合わせてるように攻撃し始める。

だが、オニンニクには一切攻撃が通っていない。

確かに二人はタイミングを合わせてはいる。

しかし、普段から仲がいいわけではない二人の連携攻撃の威力はそこまで大したものにはならないのだ。

「ふんっ！ 勇者も所詮はこの程度か…… 『十拝臣』が3人もやられていると聞いて少し期待していたのだが……残念だ」

「クッソ！ 硬ってええ！」

アルトがオニンニクに突撃していくが、その剣はオニンニクの筋肉に弾かれる。

アルトの剣を見てみると、かなり刃毀れしているし、なんなら先のほうはヒビまで入っている。これ以上の戦闘は厳しそうなほどだ。

(いくら四天王とはいえ、硬すぎやしないか……?)

流石の優斗も、あまりのオニンクスの筋肉の硬さに、思わず困惑してしまう。

今までも『十拝臣』や他の強力な魔族と戦闘したことがあるのだが、その中には筋肉自慢の魔族もいた。

その魔族はかなり筋肉に自信を持っていたため、魔族の中でも特に筋肉を持っていたものだったのだろう。

しかし、優斗はその魔族を難なく撃破できたのだ。

その時周りの魔族は明らかに動揺していたし、おそらく筋肉自慢な魔族であったことは間違いないだろう。

だからこそ困惑する。

その例の魔族と比べても、明らかに筋肉の硬さが異常なのだ。

「何でこいつこんな硬いんだ……? これじゃあノエルちゃんがいとも勝てなさそうだ……」

「そういえばノエルも来ているんだったか……」

「ああそうだよ。この目の前の筋肉達磨さえいなければ今頃俺はノエルちゃんと



………

「アルト、ここは俺が引き止める。とりあえず、ノエルを探して来てくれないか？」

「言っておくが、ノエルちゃんが来てもあいつは倒せないと思うぞ」

「いや、こいつの相手は俺一人でもいい」

「は？ お前大丈夫か？ 頭が」

流石のアルトも、とうとう気でも狂ってしまったのかと少し心配になる。

これは実は彼なりに心配しているのだ。

今の状況、アルトと優斗の2人がかりでもオニニクに攻撃が一切通用しない。

ノエルを呼ぶのもとりあえず戦力を増やすためかと思っていたのだが、優斗はオニ

ニクを一人で相手するつもりのようにだった。

いくらなんでも無謀すぎると、アルトは思う。

しかし、どうやら優斗にも考えがあるようだった。

「多分だけど、こいつの筋肉の硬さには何かしら理由がある」

「理由？ 筋トレしてるから？」

「ああ。いくらなんでもこいつの硬さはおかしい。魔法か何かで強化されているんだと

思う。だから、ノエルと一緒に原因を探ってくれ」

「お前、一人でいけるのか？」

「心配してくれるのか？」

「いや。お前が負ければ次は俺だから、それが嫌だっただけだ。だから、さっさとノエルちゃんと筋肉達磨の筋肉強化の原因見つけて、サクッと解決してくるよ」

「頼んだ」

アルトは特に返事はせず、その場から急いで走り去っていく。

意外にもオニンニクはアルトを追うことはなかった。

「ガッハッハ！ お主一人でワシの相手をするのかえ？」

「ああ、お前の相手は俺だけで十分だ！」

四天王との一騎打ちが、始まる。

## WANT MUSCLE

「アルト、無事だったんだね」

「クロエこそ、無事でよかった」

「状況は？」

「四天王のオニンニクってやつと、ハーレムクソ勇者が戦ってる。はつきり言って憎たらしいあいつでも勝てそうにないくらいの強敵だ」

「優斗は大丈夫なの？」

「いや……………あの四天王の強さは異常だ。あまり長くは持たないと思う。けど多分、あいつの力には何か秘密がある。俺はそれを探しにいくつもりだ」

「分かった。俺は優斗の援護に行ってくる」

アルトとクロエはお互いの拳を合わせ、互いの健闘を祈り合う。

両者はそれぞれの戦場へと、足を運ばせるのであった。



少し金の髪が混じった銀髪を持つ少女が、赤髪の大剣を持つ少女と交戦していた。

片方は北の勇者、ノエルⅡエヴェリーナ。もう片方は勇者パーティーの一員であるセリカⅡアドレイドだ。

「このっー」

セリカの戦い方は少々荒々しく、細い腕ながら大剣を両手、あるいは片手で振り回している。元々セリカは大剣使いであったため、この光景はなんら不思議ではないはずなのだが、普段の彼女は大剣を片手で振り回し続けることはできない。そのことから、彼女の筋力が異常に発達していることがわかる。

ただ、その程度では勇者であるノエルには敵わない。それほど勇者という存在は規格外なのだ。本来ならば、このままセリカは勇者であるノエルに敗れていただろう。

しかし、彼女は一人ではない。まず、セリカが大剣を振り回し続けることができるのは、後方にいる聖女ことエレナⅡセレナーデがセリカの疲労を回復し続けているためだ。それに加え、セリカに攻撃を加えようとすると、カカエがささず高火力の魔法弾をノエルへと放つのだ。

「別にやられはしないけど、このままじゃこの三人を倒せそうにないわね……」

「筋肉の素晴らしさがわからないだなんて、あんたおかしいんじゃないの？」

「流星は勇者パーティーの一員といったところね……さて、この状況どうしようかしら」

「ちよつと！ 無視しないでよ！」

「大剣振り回してるだけの脳筋バカはともかく、後方から魔法を撃ってくるパープルガールが厄介ね……」

「カツチーン！ 誰がバカですつて!? 頭にきたわ！ 決めた。あんたは私が倒すから！」

「あつ！ あんなどころに『飲むと世界一の筋肉が手に入るプロテイン』があるわ！」  
もちろん嘘である。

「えっ？ どこどこ？」

「まさか引つかかるなんて………やっぱり脳筋バカじゃない」

「はあ!? 騙したわね………? もう許さないわ!! そのふざけた態度！ 絶対改めさせてやるんだから!! カカエ！ エレナ！ 援護頼むわY………つてあれ？ 二人ともどこに………」

「二人なら『飲むと世界一の筋肉が手に入るプロテイン』を手に入れに私が指差した方へ行ったわよ」

「嘘でしょ!?!」

『飲むと世界一の筋肉が手に入るプロテイン』なんて馬鹿げたものが存在するわけがないし、第一そんなものがあつたとして世界一がどの程度のものかなど一切わからない

い。ただ、セリカ達は今や筋肉バカと化している。

別に筋肉にこだわるバカというわけではない。むしろ、筋肉を極めるためには多少頭で考えながら体作りをしていく必要がある。ただのバカでは、良い筋肉は手に入れることは難しいだろう。

しかし、セリカ達の筋肉への執着は元々あったわけではなく、洗脳など、何かしらの手段をとって後付けされたものだ。そこに筋肉に対する知識など存在しないし、それなのに筋肉は欲しようとする。となるとどうなるか、筋肉に関する話題に対して、なぜかポンコツになってしまうのだ。

「さて、一騎討ちといきましようか」



「……………そろそろ、厳しいな……………」

「ハッハッハ！ それはそうだろう。なんせワシには筋力大幅強化の術がかけられとる

からなあ」

優斗とオニンニクは、拮抗しながらも、剣と拳を互いにつつけ合っていた。しかし、優斗の方は着実に体力を減らされ続けていた。今はかろうじて均衡を保っているが、いつこの状況が崩れてもおかしくはない。

正直、オニンニクが馬鹿正直な力比べに乗ってくれたのは助かった。変にこの押し合いをやめて搦手を使いながら戦いを挑まれた場合、優斗はすぐにでも倒されてしまうだろうからだ。

「頼むっ！ もう少しもってくれ！」

「……並の勇者であればとくにワシにやられていただろうが、貴様、中々骨があるなあ。まあ、もうそろそろ限界だろう？ 諦めてもいいんだぞ？」

「アルトがなんとかしてくれるまで、俺は耐え続ける！ 諦めるわけにはいかない！」

「中々強い意志を持っているようだが、気づいていないのか？ 貴様、もう既に力が弱まってきているぞ？」

オニンニクの言う通り、優斗にオニンニクの拳を押し返せるほどの力は残っておらず、かろうじて今の状態を保っているのが現状だ。そして、もう既に優斗の方は押されはじめていた。

（クソっ……ダメだ……もうもたない……！）

優斗の手から、剣が滑り落ちていく、そのまま流れるように優斗はオニンニクの拳をくらい、村の家屋を破壊しながら地面へすっ転んでいく。

「さらばだ、若き勇者よ」

オニンニクが拳を振り上げる。ここで優斗を殺すつもりなのだろう。

優斗は先程のダメージからか、その場から動くことができない。オニンニクの拳に凄まじいパワーが込められているのがわかる。この拳が振り下ろされれば、優斗は見るも無惨な姿へと形を変えてしまうだろう。

カキインツ！

しかし、優斗に拳が振り下ろされることはなかった。オニンニクの拳に、小さなナイフが衝突したのだ。

ナイフの飛んできた方向へと目を向ける優斗とオニンニク。

「クロエ……………」

「ハツハツハ！ 仲間か！」

「逃げるクロエ！ こいつには敵わない!!」

勇者である優斗でも力負けしたのだ。クロエ一人で対処できるような生易しい相手



ではない。優斗はクロエを逃す時間を作るために再び剣を取ろうとするが、まだダメージが抜けきっていないせいも、立つことすらままならない。思ったよりも体力を消耗してしまっていたようだ。

「大丈夫。伊達に暗殺者やってないから」

優斗の不安に対して、クロエはドヤ顔でそう答える。勇者である優斗までもが負けたというオニンニクに対して、一切臆することなく、まるで腕試しだともいうかのようにな敵な笑みを浮かべている。

「四天王であるこのワシに勝つというのか？ 面白い。来い!!」

恐れ知らずなクロエの様子に、オニンニクの口角も自然と上がっていく。

勇者と四天王の戦いは幕を閉じ、暗殺者と四天王の戦いが始まった。



「!」

「」

（何喋ってるのかわかんねえな）

アルトはクロエと別れた後、ノエルとセリカが戦闘している場所に到着していた。だが、アルトは戦闘に加勢をしていない。この場はノエルに任せるぜ！ とか、そういうわけではない。アルトはノエルに加勢するつもりでいる。ではなぜ、今加勢しにいけないのか、それは——

（ノエルちゃんピンチに陥った時に、俺が颯爽と現れ、その場を治める。そうすれば、ノエルちゃんも俺のことをカッコいいって思ってくれるはずだ！）

——だ！ ぶ身勝手な理由だった。ノエルのピンチを救うことで、ノエルに対してアピールしようとしているのだ。緊急事態に陥っていても、やはりアルトはアルトだった。

「——！——」

どのタイミングで参戦しようかと、アルトが頭をフル回転させていると、突然ノエルがアルトのいる方向へと指を指す。まさか俺の存在に気づいて!! と困惑するアルトだが、ノエルは別にアルトの存在に気づいていたわけではない。たまたまセリカ達を騙そうとして指差した先にアルトがいたのだ。

そして、それに見事に騙されたカカエとエレナがアルトの方へと向かってくる。

（嘘だろ!!? なんでバレてんのー!?!）

アルト自身も勇者であるため、カカエとエレナの相手をすることはそこまで無理な話

ではないのだが、しかしそれとは別に、かっこよく登場しようというアルトの目論みは、不運なことに崩れ去ってしまったのだった。

## 技術は時に筋力をも超越する

大胆で恐れ知らずなクロエ、はちきれんばかりの筋肉に自信を持っているオニンニク。両者は互いに睨み合う。いつ戦闘が始まってもおかしくないような雰囲気の中、先に動いたのはクロエだった。

「むっ、消えた？」

オニンニクの視界からクロエの存在が消える。

「目の筋肉は鍛えなかつたみたいだね」

次の瞬間には、オニンニクの首元にナイフが突き立てられていた。暗殺者だけあつてか、一切の物音を立てずに、気配を絶つてオニンニクの背後に回り込んだのだ。

「一瞬でワシの後ろに………天晴れだ。目の筋肉も、ワシはしっかり鍛えたつもりだったんだが………」

オニンニクは動じる様子はない。ナイフ如きでは自慢の筋肉に傷をつけることはない、自身の筋肉に絶対的な信頼を寄せているからだ。クロエもそのことを理解しているのか、ナイフを突き立てるだけにとどめている。一連の行動はあくまで威嚇だ。

お前の背後にはいつでも回り込めるんだぞと、自身の力を誇示することで、少しでもオニンニクの関心をひこうとしているのだ。

というのも、クロエとしてはオニンニクを倒す必要はない。優斗を守りつつ、アルトが何か手を打ってくれるまで時間稼ぎをすれば良い。そのために、まず、オニンニクの関心が優斗ではなくクロエに向くように、また、オニンニクに『こいつは面白いやつだ、もう少し戦いたい』と思わせるように立ち振る舞うことだ。

見た感じ、オニンニクは任務を淡々とこなすような仕事人間というわけではない。筋肉を愛し、また、その筋肉を活かす戦闘ができることに喜びを感じる性格だ。クロエとの戦闘では筋肉を活かすことは難しいかもしれないため、オニンニクは楽しめないのではないかと思うかもしれないが、筋肉を活かすだけなら別に戦闘である必要はない。

ということとは、オニンニクは筋肉を活かせるから戦闘が好きなのではなく、元々戦闘が好きなのだ。そこに筋肉を活かせるという面もあつて、一石二鳥だと感じているというだけの話だ。

「っ!？」

オニンニクが下に目を向けると、なんと、クロエの小さなナイフによって、己の腹が貫かれている。筋肉をも貫通し、刺された箇所からは血がダラダラと流れている。

「なん……………だ……………一体……………何……………を……………」

血が止まらない。

「なんだ……なんなんだこれは……！」

オニンニクの顔に、焦りの色が浮かぶ。自身が絶対的な信頼を寄せていた筋肉が、ただの14歳の小娘のナイフで貫かれたのだ。しかも、このまま傷を放置していれば、下手したら死ぬかもしれないほどの致命傷だ。

「何を……そんなに驚いてるんだ？」

その光景を見て、優斗は困惑する。

クロエがオニンニクに対してダメージを与えることに成功したからではない。

オニンニクの体に何の異常も発生していないのにオニンニクが狼狽しているということにだ。

優斗の目線では、クロエが手に何も持たずにオニンニクの腹に何かを刺すような動作を見せたら、オニンニクがいきなり動揺し始めた、というような状況になっている。

それもそのはずだ。実際にはクロエのナイフはオニンニクの体を貫くどころか、傷をつけることさえできてはいない。

ただ勝手にオニンニクが体を貫かれたと思っただけだ。

クロエはまだ暗殺者として暗殺を執行していた時代に、この世界で一番の殺し屋に師事していたことがある。正確に言うと、クロエのことをこき使っていた貴族の連中が、

世界一の殺し屋に頼んでクロエを弟子にさせたのだ。というのも、元々はその例の世界一の殺し屋を雇おうとしていたらしいが、彼はその申し出を断った。しかし、彼は弟子を取ることに抵抗がなかった。そのため、貴族の連中は、暗殺者を自分達で調達し、彼の弟子にさせることで、一流の暗殺者を育て上げようとしたのだ。

クロエの他にも、同じように弟子として受け入れられた暗殺者は多数いたが、しかし、ほとんどは世界一の殺し屋の技術についていけず、途中で挫折してしまったり、兄弟弟子による暗殺にあつてしまつたりして、世界最高峰の暗殺技術を身につけることはなかった。

そんな中でも、彼の最高峰の技術を、完全ではないが、受け継ぐことに成功した超一流の暗殺者が3人だけ存在した。

その中の一人がクロエだ。

今となつてはその殺し屋がどうしているのか、また、他の二人がどこで活動しているのかはクロエにはわからないが、クロエはこの世界の暗殺者の中で、少なくとも5本の指に入るほどの実力を有している。

「くつ、いや……これは……幻覚……か……ふむ……ワシの軍にも似たような技を使うやつがおつてな……そいつがいなければ、今頃ワシはこの技を見抜くことができずに死んでおつたかもしれん」

「その技、結構気に入ってるんだよ。あまり人を殺したって感じさせられないから」  
師である殺し屋の男から教わったこの技は、他の弟子には教えられていない。そもそも扱えるのが特に優秀な3人のみであったし、他の二人には必要ないと彼が判断したからだ。

この技は、殺しは行いたくない、しかし、生きていくために殺しは行わなければならぬ、という状況に置かれたクロエに対して、師である殺し屋がくれた技だ。

別に例の殺し屋は人情深いというわけではない。実際に、クロエを裏の世界から救出することはなかったし、クロエに殺しをやめさせることはなかった。それでも、自分の弟子になったのだからと、最低限の贈り物としてこの技を授けたのだ。

（懐かしいな……師匠………って言われるのはあんまり好きじゃないだろうけど……今どうしてるのかな………）

クロエは昔のことを思い出し、物思いに耽るが、しかし、今のクロエはもう既に暗殺者をやっていた頃のクロエではない。

殺す必要はない。責任だって、自分一人で取る必要なんてない。

クロエは再びナイフを手取る。

もう同じ手は通用しないだろう。本来殺すことに特化した技は、時間稼ぎには有用ではないのかもしれない。しかし、クロエはもう一人ではない。頼れる仲間がいる。



今はその仲間を、信じよう。

「さあ！ 次はどうする!! 小娘よ!!」

オニンクが叫ぶと同時、クロエは駆け出し、再び攻撃を仕掛けた。



「遅いわね」

セリカが大剣を振り下ろし、ノエルにダメージを与えようとするが、ノエルの動きについていけない。

大剣を振り回しているせいか、セリカの動きは少し鈍くなっている。

それでも尚そこら辺の冒険者と比べれば、セリカの大剣捌きの速さは異常ではあるのだが、それでも大剣を持っていないノエルとはどうしても差が開いてしまうのだ。

ただ、セリカの場合、おそらく普通の冒険者相手なら、大剣を使っても、他の身軽な冒険者より動きは早いだろう。

今回は相手がノエル、北の勇者だったため、セリカが遅れをとってしまったというだけなのだ。

「さあ、次は私からいくわよ。北の国の勇者の力、見せてあげるわ!!」

基本的に防御しかしてこなかったノエルだが、ここに来て反撃を開始する。

「ククク、そうだ、潰し合え……」

虚空で、髭を生やしたガリガリの老人が言葉を発する。

老人は、ノエルの真上にいるが、魔法で姿が見えないようにしているせいか、ノエルが老人の存在に気づいている様子はなく見える。

セリカは老人の存在に気づいている、というより、知っている。

何故なら、このドルーコ村の人間を洗脳したのは、このガリガリの老人なのだから。

人の脳を覗く時は脳破壊に注意しよう！

「あーもうなんでこうなるんだよ！　せつかくノエルちゃんをかつこよく助けて、キヤーアルト君カッコいい♡って言ってもらえるチャンスだったのにー!!!」

もはや優斗との約束など、カケラも頭に残っていないアルトであるが、もし仮にかつこよくノエルを助けたところで、ノエルはアルトのことをかつこいいと思うことはないどころか、心の中で感謝されることもないだろう。

そもそも、ノエルがセリカに遅れをとることなどないため、助ける場面そのものが存在しないのだ。

「えーいちよこまかとー！」

「ぎゃあああああ！　その魔法ずるい!!!　範囲広すぎるってばあああああ!!!」

先程からカカエはアルトのいる場所の半径10m以内に、対象に直接痛みを与え、最悪の場合死に至らせる究極の魔法を放っているのだが、アルトはその人間離れた身体能力で、次々にカカエの範囲攻撃を躲していく。

何度も、何度も、何度も。



北の勇者、ノエルの傍らには、巨大な大剣を地面に落とす、壁にもたれかかるように倒れているセリカの姿があった。

『ぎゃあああああ！ その魔法すごい!!! 範囲広すぎるってばあああああ!!』

遠くの方で何やら喚いている勇者<sup>アルト</sup>の声が聞こえるが、気にしなくてもいいだろう。

「さあ出てきなさい。いるのは分かっているのよ、黒幕さん」

ノエルは虚空に向かってそう言い放つ。

見た感じ、誰もいなさそうだが……………。

「よく気づいたな、いかにも！ ワタシが『十拝臣』が1人!! 千・ノーウ様だ!!」

ノエルが先程声を放った虚空から、突如、髭を生やしたガリガリの老人が姿を現した

!

『いくらなんでもおかしいだろあのクソ勇者のパーティイイイイ！ ハーレムの上に

チートかよおおお!!』

タイミングの悪いことに、千・ノーウが自己紹介をした途端に、遠くからアルトの声が聞こえてきたため、千・ノーウの自己紹介はいまいち締まらないものとなってしまうが。

「そんな素直に出てくることないんじゃない?」

しかし、ノエルはアルトの叫びを気にかけることはない。

元は自分のせいのため、ノエルとしてはアルトに対して多少の申し訳ない気持ちはあるものの、アルトにいつもしつこく勧誘ストッキングされているせいか、アルトが酷い目にあつてむしろ清々するまでである。

ここまでくると、自己紹介を遮られた千・ノーウよりも、完全に脈なしなアルトの方が可哀想かもしれない。

「しかし、おかしいな……ワタシの洗脳は完璧なはず……にもかかわらず……この村では洗脳にかかつてないのは……1、2、3、4、5……脳筋バカを入れて6……ムムム！ やはりおかしいぞ！ 何故こんなに洗脳にかかつてない奴がいるんだ？

勇者の3人ならまだわかるが……」

（私とクロエ、それに優斗にアルト、で、目の前のこいつを入れて……5？ つてことはもう1人洗脳にかかつてない奴がいるってこと？）

ノエルは脳内で洗脳にかかつていない人物を洗い出す。

ノエルはオニンニククの存在を知らないせいか、脳内でまだ洗脳にかかつていない人物がいるかもしれないと結論付ける。

一方で、千・ノーウは、クロエが洗脳にかかつていないことに、違和感を感じている。勇者の3人、それに仲間であるオニンニクが洗脳にかかつていないのはわかるが、残りの2人は誰が洗脳できていないのか分かっていないようだ。



場面は変わりーー。

「いえーい彼女さん見ってるー? 君の大事な彼氏さんは、俺の虜になっちゃいました  
〜!」

「ごめんな果林。でも俺、知っちゃまったんだ。男同士で、愛し合うってことの、喜びをさ」  
屈強な男が、眼鏡をかけた気弱そうな少年と陽気に肩を組んでビデオを撮っている場  
面。



さらに場面は変わりーー。

「だ、だめだよ……僕、男だよ? その……いいの?」

「……構わない。男だとか、女だとか、関係ない。俺は、お前が好きになったんだ」  
「……/ / /」

少し女性らしい見た目をした少年に迫る男の様子。







結局はB Lだった。



「な、な、な、な、な、なんじゃこりやあああああああ!」

千・ノーウは、ノエルの脳内を除いた際、強烈なB L成分(+ $\alpha$ )を摂取したせいで、B Lに耐性の無かった千・ノーウの脳が拒絶反応を起こし、それにより千・ノーウの魔法が解けていく。

千・ノーウは恋愛経験もないまま老後を迎えたため、そもそも恋愛そのものの経験がなかった。

今回の結果は、それが原因と言えるだろう。

やがて千・ノーウは急激な脳へのショックにより、気絶してしまった。

「?」なんだかよくわかんないけど、倒せたのなら、いつか」

当然、ノエルがそんな千・ノーウのことを知る由はない。

こうして、ノエルの活躍(?)により、ドルーコ村の洗脳は解かれたのであった!

## 筋肉で解決しないこともある

「あ……………」

「どうやら、勝負あったようじゃな」

ノエルが千・ノーウの脳を破壊する少し前、クロエは、オニンニクに敗れ、その場で腰を抜かしてしまっていた。

(やばい、動けない…………)

「では、さらば！」

オニンニクの拳が、クロエに振り下ろされる。

ガギインっ！

しかし、そんなオニンニクの拳は、空中で静止せざるを得なかった。

横合いから、優斗が割って入りながら、オニンニクの拳を聖剣で受け止めたのだ。

「ありがとうクロエ。おかげでもう動けるようになった。ここは俺に任せて、ゆっくり休んでいてくれ」

「流石は勇者、復活が早いの」

優斗は再び、オニンニクとの戦闘を開始する。

（う、嘘だ。うん、今かっこいいって思っちゃったのは、多分、憧れとかそういうので、別に全然、恋愛的なやつじゃなかったはず……うん、そのはず）

脳内でクロエがぶつぶつと呟いているが、優斗とオニンニクは、そんなことはお構いなしに戦闘を続ける。

だが、先程と同様、優斗とオニンニクの強さには圧倒的な差があるようだった。

「何故だ……何故、ワシの攻撃が通じん!？」

ただし、さつきと違い、今度は優斗が優勢だが。

ノエルが千・ノーウを討伐（?）したおかげで、オニンニクにかかっていた筋肉バフ（?）が消え去り、優斗がオニンニクに力で勝てるようになったのだ。

「…どうやら、アルト達がなんとかしてくれたようだ。よし、一気に決めるぞ」

「くっ、これでは到底勝てんわい……。ええい、しかたない。あの小生意気なやつから貰ったこれを使うしかあるまい」

優斗がオニンニクへの攻撃をさらに苛烈にしようとするが、それに対してオニンニク

は反撃もせず、懐から玉を取り出し……。

「ドロンっ！」

そして、そのまま煙に包まれて、消えた。

「逃げたのか………」

「さっきの玉……まさか………」

クロエはオニンニクが使った煙玉に見覚えがあるようだが………？

「とりあえず、俺は宿の方に戻って様子を見てくる。クロエは、そうだな………アルトのところにも行ってやってくれ」

「わかった」

優斗とクロエは、それぞれ別々に行動を開始した。



「だーかーら！俺は、洗脳されてた君達を助けようとしてあげてただけなの！俺が何かしたとか、そんなのは全然ないから！」

「本当かなあ？君がボク達を洗脳して、あんなことやこんなことをしようとしてたわけじゃなくて？」

千・ノーウによる洗脳が解けた後、アルトは謂れない罪を着せられそうになっていた。

カカエが、自分達に洗脳をかけて好き勝手しようとしていたのが、アルトなのではないかと疑ったからだ。

というのも、アルトは洗脳されていたカカエとエレナの2人と戦っていたため、2人の洗脳が解けた時、2人の目の前にはアルトの姿があったのだ。

アルト⇨変態、そんなイメージがついていたカカエは、結果として真つ先にアルトを疑ってしまうことになってしまった。

ちなみに、この場には既にエレナはいない。

カカエが、『もう一度洗脳されたら困るから、一度宿に戻って皆を呼んできてほしい』と、エレナに頼んだのだ。

酷い言われ様である。

「怪しいなあ〜?」

「本当に俺、何もやってないのに……」

しかし、そんなアルトのことを、神は見捨てなかつたらしい。

「カカエ姉さん、アルトは嘘言ってるよ。この村に魔王軍がやってきて、皆のことを洗脳してた。だから、アルトは皆を助けようとして、頑張ってくれてた」



『え？ え？ え？ だっておばさん、私の筋肉褒めてくれてたのに……え？ どうなってるんだ……筋肉で解決できないこともあるのか？』

『何の話をしてるんだデメエはよオ!! ガキだからって何でも許されると思うなよコルア!!!』

『うゝつゝ……ひゝつゝ……ぐゝめゝんゝなゝさゝいゝ!!!』

ドルーコ村のとある宿屋では、怒号が鳴り止まない。

宿屋を破壊したマコが、宿屋のおばちゃんに叱られているのだ。

「はわわっ！ 知らないうちに大変なことになってます？」

「うーん、やっぱり洗脳解けてるんだ。私、別に何もしてないんだけどなー」

「あれ？ ノエルさん？ って、後ろに引き連れてるのって……」

エレナが声のする方へ顔を向けると、なんと、そこにはロープでぐるぐる巻きにされたセリカを引きずるノエルの姿が……！

というのも、ノエルとしては洗脳が解けているのかどうか、それを確認する手段など持ち合わせてはいない。そのため、念には念をということで、ノエルに敗れてその場に倒れていたセリカを、雑にロープで縛っておいたのだ。

ただ、セリカはかなり力が強いので、念を入れすぎてロープを巻き過ぎてしまった。

そのため、ノエルはそんな面倒な状態になったセリカを、とりあえず同じパーティメ



ンバーであるエレナに押し付けようと思いついたのだ。

「あ、エレナさんやつほー。私もこの村にちよつと用事があつてさ。あーと、セリカさん、返しておくね」

「ええ………返しておくつて言われても………」

ノエルはグルグル巻きにされたセリカをエレナに引き渡す。

思つたよりたくさんさんのロープを巻かれているせいか、簡単には解けそうになさそうだ。

「んーと、まあ、適当に解いといて〜。じゃあねえ〜」

早々にその場をささろうとするノエル。

そんなノエルを冷めた目で見つめるエレナ。

ガシッ

もちろん、そんなエレナがノエルのことを逃すはずもなく………。

「解くの、手伝つてくさいね？ 元々、ノエルさんがやったことなんでしょう？」

「は、はひ………」

後日、ノエルが言うには、この時のエレナは聖女だとは思えないほど怖い顔をしてい

たらしい。



薄暗く、灰色にくすんだ空が特徴的なここ、魔王城で、2人の男女が会話を交わしていた。

1人はドルーコ村に侵略をした四天王の男、オニンニク。

そしてもう1人は、紫色の肌を持ち、頭に大きく捻れた、まるで血で染められたかのような真つ赤な角を2つ持つ、14ほどの少女だ。

「ふーん。で、無様に逃げ帰ってきたんだ？ 四天王っていうのも大したことないんだねー」

「お主もその四天王の1人じゃろて」

「んー？ まあ私は合法的に人を殺すために魔族になりたかったただけであって、別に四天王だとか、そういうのどうでもいいんだよね。たまたま人間の頃に学んでた技術が、魔王に評価されたってだけだし？」

少女はどうやら、元は人間だったらしい。

魔族になった理由も、かなりトチ狂ったものとなっており、彼女の倫理観が狂っていることが窺える。

「また魔王様のことを呼び捨てに……。そういえばセツナよ。お主と同じ術を使いおる奴がおったぞ。名は確か……。クロエと言ったか」

「ん。今なんて言った？」

「じゃから、お主と同じ術を使いおったやつが」

「いや、名前だよ、名前」

「名か。クロエだったと思うが……」

クロエ、その名前を聞いた途端。今までつまらなそうに、適当に会話を進めていた少女の顔が、パッと、まるで曇り空から一瞬で快晴になったかのように、明るくなる。

「ふーん。クロエちゃん、いたんだ。へえ、勇者パーティに入ってるんだ。てつきりまだ、暗殺者、続けてるもんだと思ってたけど」

「知り合いか？」

「知り合いどころか。私にとっては親友みたいなものだよ。だって、私と同じで世界一の殺し屋に認められた数少ない優秀な弟子なんだからさ」

少女は一人、ほくそ笑む。

「よし、決めた。次の作戦、私にやらせて。クロエちゃんが今どうしてるのか、気になる

し」

「いいのか？ 場合によっては、そのクロエと殺し合いになるやもしれんのだぞ？」

「は？ 何かダメなことあるの？ むしろ最高じゃん。だって、クロエちゃんと殺し合いができるんでしょ？ ふふっ、楽しみになってます♪」

少女は、狂気的な笑みを浮かべる。

「待っててね、クロエちゃん、私が、じっくり、痛ぶってから、殺してあげるからね……」

## 好きに性別は関係ない

北の国イームサにある喫茶店 *trueloves*。喫茶 *ts* とも呼ばれることもある店で、基本的には恋人同士で来店する客が多い。最近では老若男女問わず使われるようになったらしいが。

そんな喫茶店で、2人の男女が会話をしていた。

アルトと、クロエだ。

今日、アルトはクロエの手伝いもあって、北の国でノエルとデートをする予定だったのだが……………。

「クロエ、聞いてくれ、失恋した」

どうやらノエルとのデートは、上手くいかなかったようだ。

1時間すらもっていない。時間にして約30分ほど。

もはや待ち合わせの時間のほうが長かったんじゃないかと思われるレベルだ。

当然、待ったのは約束の時間の一時間以上前から待ち合わせ場所に待機していたアルトの方で、ノエルの方は待ち合わせ時間から15分ほど遅刻してやってきた。

「……………そうか。んーと、まあ、どんまい。大丈夫、次があるよ」

こういう時、どういう言葉をかければいいのか。今まで恋愛相談なるものを受けてこなかったクロエには、全くもってわからない。

ただ、今自分ができる精一杯の慰めを行おうと、必死に言葉を探す。

「いや、振られたわけじゃなくて」

しかし、どうやらアルトは振られたわけではないらしい。

失恋した、という言い方からして、アルトの方からノエルの告白を振ったとか、そんなことはないだろうが。

「?」

「えーと、ノエルちゃんの趣味が……………」

「……………あー。まあ、そうだね」

……………どうやらノエルの性癖BL好きを知ってしまったらしい。

別に、BL趣味が悪いというわけではない。ただ、相手の趣味についていけるかどうか、そう考えた時、アルトにはそれが無理だった、という、ただそれだけの話だろう。

「俺、一応女の子だし、まあ、何だろ、慰めデートとか、する?」

あまりにもアルトが可哀想なため、クロエはアルトに慰めデートの提案をする。ちなみに、クロエは今、アルトの前でも一人称は『俺』で通している。

アルトには、前世が男であることを話しているからだ。

クロエにとっては、どちらかといえば、『私』よりも『俺』の方が自分らしさを感じるのだ。だからこそ、できれば本当は、一人称は常日頃から『俺』にしておきたいらしい。「慰めデート……うん、いいな……お願いします」

そしてアルトの方も、クロエの提案を飲み込むことにした。

元々定期的に遊びに行く仲ではあるため、クロエとアルトの仲はそこそこの良いのだ。

「じゃあ、行こっか。どこか行きたいところ、ある？」

「うーん。いや、クロエの行きたいところかでもいいよ」



俺の名前はアルトIIゲスイヤー。一応、西の国トスエウで勇者をやらせてもらっている。

で、現在は前世が男で、現女の子のクロエって子に慰めデートをしてもらっている最中だ。

「武器屋……………」

ただ、クロエはどうやらデートをしたことがないみたいで、デートだというのに、俺達が訪れたのは武器屋。

ムードも何もあつたものじゃない。まあ、別に好き同士だとか、そういうわけでもなく、単純に凹んでいた俺を慰めるためのものなのだから、場所なんてどこでもいいといえばそうだろうけど。

「えーと、ごめん。デートって話だったのに、武器屋だと、変だよね……………」

「いや、全然。別に俺ら、恋人ってわけじゃないんだし。慰めデートも、クロエに付き合ってもらおう形だしさ」

「そっか、えーと、武器、見てきてもいい？」

そう言うクロエの顔は、ちよつとワクワクしてそうに見える。

暗殺は嫌いだって言ってたけど、案外武器を見るのとかは好きそうなんだよな。

前世が男だったし、かつこい武器とかそういうものに憧れるところがあるのかも？

そういえば、マコちゃんと伝説の武器なるものを取り合った時もあったって言ってたっけ？ 偽物だったらしいけど。



「うん。全然大丈夫。俺もちょうど武器切らしてたから、ついでに見ておくわ」

まあ、ぶつちやけ俺はそんなに武器使う機会が多いわけじゃないから、武器切らして  
るつてのは嘘なんだけど。

というか、クロエ、どこ行つたんだ？

俺が返事した時には既にいなくなつてたんだけど。

あ、いた。

『わっ、これかっこいいな………』

ありや、あそこにあるのつて大剣だよな。クロエが扱うのは短剣だし、あんなもの  
でも扱えないと思うけど、まあ、見たかつたんだらうな。

なんか、武器見てる時のクロエ、目がキラキラしてて、なんていうんだらう、こう、か  
わいいいな……。

それにしても、本当にクロエは優しい。

今まで、俺が関わつてきたどんな女の子よりも。

まあ、そりや、前世が男だから、他の子と違うつてのはあるかもしれないけど。

俺は、今まで出会つてきた女の子のことを思い出す。

『えーと、控えめに言つて気持ち悪……いや、正直ちよつと、好きじゃないつていうか、  
悪いけど、さよなら！』

『本音：貴方に釣り合う人なんていませんよおく!!! 建前：（私じゃ貴方と釣り合わないと思います。なので、ごめんなさい!!!）』

『うざ、しね』

『……………（無視）』

『一体いつから私と付き合えると錯覚していた？』

『二度と話しかけないでくださいこのドブネズミが』

『逃げ出すよりも進みたい派なんですけど、流石に逃げ出すことを選びたいです』

『消えろ、空の彼方へ吹き飛ばされんうちにな』

『……………お前を〇す』

『この国ごと消えてなくなってください！』

『スツ（無言で中指を立てる）』

『ねえ、アルト君。男の子と付き合ってみる気はない？ ほら、この本、B1っていうんだけど、この世界にはね、男の子同士の愛情つてものが存在するの。女の子から嫌われがちなアルト君にとっても、悪い話じゃないと思うけど。ほら、優斗なんかはどう？』

勇者だし、誠実だし。いいと思うわ。男同士』

……………泣きそう。

俺なんか酷いことしたっけ？

何でこんなことになってるの？

確かに、いろんな女の子に話しかけたのはそうなんだけどさ。

一回話しかけただけだよ？

そりゃ、話しかけられた側からすれば鬱陶しいだろうけどさ。

しつこく付き纏ってないし。ここまで言われることなくない。

はあ。

何でこんななんだろ。

「アルト？」

「ん？ あ、どうした？ もう買い物終わった？」

「えと、涙、出てるけど……………」

「え…………？」

「……………そつか。ごめん、気を使えなくて。失恋したんだもんね。それは、辛いよね。えーと、ほら！ もうすぐ昼だし、近くに最近できた美味しいお店あるからさ！ そこでご飯食べようよ！ 俺、結構稼いでるから、今日は奢るし！ ね？」



俺はオムライスを。クロエはハンバーグを頼んで食べることにした。

クロエは、注文したちよつとソース多めのハンバーグを、口が汚れるのも気にせずバクバクと食らっている。

思つたよりも豪快に食べるんだな。

俺がイメージしてたのは、もつとチビチビ食う姿だったんだけど。

まあ、別に悪いわけではない。というか、むしろ見てるこつちも気持ちがいいし、変に気を使わなくて済む気もする。相手が丁寧な食べ方していると、ほら、自分もちよつと気を使いながら食べなきゃいけない気になる気がするし。

「んー！ アルト、これ、美味しいよ、ほら、一口あげるから！」

「ん、ありがとう」

「にしてもこふえ、ふおんほうにおいひいはあ（にしてもこれ、ほんとうにおいしいなあ）」

美味しそうにハンバーグを頬張るクロエ。口元こそ汚れているが……。

ああ、こうして見ると、クロエって可愛いんだな。

今まで色んな女の子に嫌われてきたけど、クロエだけは俺に優しくしてくれるし。

前世が男、か。

何で俺、そんな程度で冷めたんだろ。

今までこんなに俺に優しくしてくれて、こんなに可愛い子、出会ったことあるか？  
……………うん。いない。いなかった。

そうだよ、前世が男？ それは何だっというんだ。

魂だかなんだったが、もし輪廻転生を繰り返しているのだとしたら。

俺だっつて女だった時はあるだろうし、あのにつきハーレム野郎だっつて、もしかしたら前の人生では逆に誰かのハーレム要因の美少女だった可能性だっつてある。

クロエのこと、狙っちゃってもいいよな？

一回、告白断られてるけど。

でも、あの時、今までの女の子みたいに、露骨に嫌な顔をしたりだとか、そんなことはなかった。

『あの、告白してくれたのは嬉しい。けど、付き合うのは……………ごめん』

『その、この話は……………誰にも内緒にしてほしい話なんだけど……………その、まだノエルにか話してないから』

『私……………いや…俺……………実はお……………とこなんだよね……………』

『いや……………その……………正確にいうと……………前世が男だったっつていうか……………』

そうだ、思い出してみても、どちらかかっていうと、自分の前世が男だから、付き合うことができる。そんな言い方だった。

多分、性自認が男よりだとか、そんな感じだろう。

でも、自分が男相手は無理だとか、そういう言い方ではないよな。

つまり、俺が無理だとか、そんな言い方じゃない。

だとしたら、俺にもチャンスがあるってことだ!!

そうと決まれば、さっそく……。



うん。アルトの様子も、ちよつと落ち着いてきたみたいだ。

さつきは涙まで流してたし、相当ショックだったんだろうな……。

別に、アルト自体そんなに悪い奴じゃないのに。

いい人、見つかるといいんだけどな。

中々、そうはいかないのかなあ……。

どうしてだろ。

同じ勇者でも、優斗の方はモテモテでハーレムパーティー築いてるのに。

そういえば、南の勇者のユリウスさんも、イーツア王国の王族であるエスメラルダさんと婚約交わしてららしいし。なんなら、滅茶苦茶仲が良いって噂も聞くし。

アルトはそういう相手いないのかなあ……………。

「クロエちゃん」

ん？

「アルト？ どうしたの？」

「はら、あーん」

「?!?!」

「?!?!?!」  
急にスプーン差し出してきた……………どうしたの？

あーん？ これ。素でやってるのかな……………。さっき俺がハンバーグ一口あげたら、

そのお返ししてことかな？

うーん。アルトの顔見ても、別に照れてるとかなさそうだし、他意はなさそう、つて

いうか、俺が恥ずかしがる方が、おかしいよな。

よし、平常心だ。

お返しをいただくだけだ。何も恥ずかしいことはない。

「あ、あーん…………」

うん。美味しい。

いいな、このオムライスの味。

あーんはちよつと、恥ずかし……いや、恥ずかしがったらダメだ。別にアルトはそんなつもりないんだから。

「……………クロエちゃんつて、食べ方可愛らしいよね」

「んゝんゝ!?! か、可愛らしい?」

そ、そうか? 結構豪快に食べてるつもりなんだけど。

こ、これ可愛らしい食べ方なの!?!

「あ、いや、別に変な意味じゃないよ? ただ、見てて飽きない食べ方してるなあってん、アルト、急に俺のこと褒めてき出して……………どうしたんだろ。」

なんか、恥ずかしいっていうか。いや、恥ずかしくな……………つて、流星に誤魔化すのも難しくなってきた。

ぶつちやけ、普通に恥ずかしい……………も、もしかして揶揄つてるとか?

「クロエちゃん? どうしたの? 顔赤いけど」

「え!? い、いや、なんでもない!」

照れすぎ照れすぎ照れすぎ!!!

別にアルトは気にしてないから!

俺が変に意識しすぎてるだけだから。動揺してはいけない…。





## 勇者にだって悩みはある

四天王オニンニクとの死闘を終え、勇者一行は休暇に入った。

それに伴って、俺も休日を大いに楽しもうと、町をフラフラと歩いていたのだけでも……。

「はぁ……………」

そこには、なんだか少し元気がない優斗ゆうしやがおりました。

「優斗、どうしたの?」

流石に無視というわけにも行かないし、どうせ何か目的があったわけでもない。

だから、とりあえず優斗には声をかけてみることにした。ノエルとアルトも、なんか用事があるみたいだったし、丁度いいかもしれない。

「ああ、クロエか……………。いや、別に、なんでもない」

そう言う優斗は、やっぱりどうみても疲れた顔をしているし、絶対何か悩み事があるだろうなって雰囲気も感じた。

無理に聞き出すのも良くないし、でも、放っておくわけにもいかない。だったら、たまには優斗のことを連れ回してみるのもいいかもしれない。

「優斗って、今日何か予定ある？」

「いや、特に何も無いけど……」

「じゃあ、私に付き合ってよ。アルトもノエルも、付き合い悪いから」

半ば強引に優斗の手を引っ張り、町中を連れ回す。

優斗は俺の強引さに、流石にちよつと困惑してるのか、「え？」とか「あ」とか、少し間の抜けた声を出したりしている。

「……、武器屋か？」

「うん」

ヤベエ……。出かけるって言っても、正直どこに行けばいいのか分からなかった。普通の女の子なら、服を買いに行ったり、美味しいスイーツでも食べに行ったりするんだろうが、生憎俺の前世は男。今世でもその意識を引っ張っているせいか、あんまり女の子の子してない。

だから、前にアルトと来たばかりであるのにも関わらず、また同じ武器屋に来てしまった。

今度エレナさんとかアンジェ辺りに、服屋とかそういうの教えてもらおうかな  
……………。

ノエルは多分オタク趣味に走ってとんでもないコーディネートを要求してきそうだし

し、マコは厨の二の二オイを漂わせてるからダメだろうし……。

「おっ? 嬢ちゃん、前も他の男とこの店来てなかったか?」

「そうなのか?」

「うん。アルトの慰めデートで、一回」

しかも店主のおっちゃんにも前に来たことを指摘されてしまう始末。別に彼氏とかそういうわけじゃないから別にいいんだけど、優斗に前に行ったのにわざわざなんで来たんだって思われそう。

まあ、行ってしまったものは仕方ない。

とりあえず俺は武器屋の中に入って行き、前に見た大剣やらそこらとは別の、小さい子供でも扱いやすい、小型のナイフや小物を見ることにした。

幸いなことに、この武器屋はかなり大きめの店で、武器一つ一つを見ていけばそれに時間を潰せそうな雰囲気はあった。

「そういえば、前から思ってたんだが……」

「ん、何?」

「アルトとクロエって、付き合ってるのか?」

「え、何で?」

「いや、アルトって、まあ、その、中々女性と遊ぶことってないから、そのアルトと仲良

さそうにしてるし、もしかしたらそうなのかなって」

まあ確かに、アルトは女性から異様に避けられがちだし、そんなアルトと付き合いのある女の子って、俺かノエルくらいなものだし。

一応マコもアルトとの仲はそこまで悪くないけど、多分マコは恋愛とかどうでもよさそうだし。

「別に付き合っていないよ。お互い仲良い友達だと思ってる。それに、今は分からないけど、ちょっと前まではアルトってノエルのことが好きだったみたいだから」

「そうなのか、デートって言ってたから、てつきりそういう関係なのかと」

まあ、でも確かに一回告白はされてるし、お互いに恋愛のれの字もなかったかかって言われると微妙な気もするが……。

あと一応、アルトから告白されたことは伏せておく。受け入れたならともかく、振ってしまったわけだし、アルトの名誉のためにも、あまり言いふらさない方がいいだろう。アルトはほとんどの女性からの信用を既に失っているのだから、もう遅いかもしれないが……。

俺と優斗は、しばらく武器屋でふらふらとしながら、どうでもいい世間話を交えて話す。

気づけば、もう夕暮れ時。結構な時間を、武器屋で潰せたらしい。

「そろそろ出るか」

「そうだね」

俺と優斗は、武器屋から出る。

「優斗、気は紛れた？」

優斗の表情からは、迷いや憂鬱さはもう感じられない。ただ、感じられないだけで、まだ悩んでたりするのもかもしれない。そう思った俺は、ついつい優斗にそう尋ねてしまふ。

「ああ、もう大分。ていうか、やっぱりクロエ、俺のこと気遣ってくれてたんだな」

「まあ、そうだね。でも、特に予定もなかったし。私は私で楽しかったから」

「そっか。わざわざ武器屋を選んだのも、やっぱり俺に気を使ってくれてたんだな。そりゃそうだよな、女の子なら、服屋とか、そっちの方が興味あるだろうし……」

「あ、うん、ソダネ」

店のチョイスに関して、単純に服屋とか、そういう女の子らしい場所に興味があったからなんですけど……。

でも流石に、「服屋とか興味なかったから武器屋行ったわw」はダメだと思う。多分アングエ辺りに聞かれたら、女の子とはなんたるものか、徹底的に教え込もうとしてくるだろう。多分ノエルも悪ノリで介入してきてカオスなことになったりしそう。いやな

る。絶対になる。

だから俺は、適当に相槌を打つ。嘘をついたことにちよつぱり罪悪感を感じたりもするけど。

「もし私でよければ、いつでも悩み、聞くけど」

「今、話してもいいか？」

「? うん。別にいいけど」

まだ時間はあるし、悩み事があるなら全然付き合う。同じ仲間な訳だし。

「そっか。ありがとう。皆には、中々言えなさそうな内容だから」

「そうなんだ。言いたくなかったら、無理に言わなくてもいいよ」

「ああ、そうだな。本当は、言わない方がいいのかもしれない、けど、思うんだ。俺なんかが勇者で、本当にいいのかって」

「うん」

「確かに、勇者としての力は貰ったよ。だから、勇者として、活躍はできる。でも、思うんだ、俺。皆のリーダーとして振る舞ってるけど、俺は本当に、この立場でいいのかなって」

「少なくとも、私は優斗がリーダーだから、あのパーティがあるって思うけど」

「そうなのかな。でも、エレナは、小さい頃から教会で過ごしてきて、聖女としては前代

未聞って言われるくらいに努力してる。セリカだって、貴族のいいとこの娘さんなのに、周りの反対にも負けず、小さい頃からずつと体を鍛え続けたらしいし、カカエも、家の事情とかがらみとか、全部乗り越えて今俺についてきてくれてる。マコもアンジェも、それにクロエも、まだ小さいのに、勇者パーティの一員として、よくやってくれてる。皆、凄いいんだ」

「そうだね。皆、確かに凄いと思う。誰もがあんな風になれるかって言われたら、正直無理かなって思うくらいには、眩しい人達だと思う」

「そうだよな。だから、思うんだ。あんなに凄い人達を、俺なんか偉そうな顔して連れ回してもいいのかって。俺は確かに、勇者に選ばれた。だから、それに伴って力も得た。努力もした。でも、それで彼女達に釣り合えるのかって考えても……正直、釣り合えない気がしてならないんだ」

「そんなこと、ないと思うけど」

「どうか。俺は、ただ与えられた役目をこなしてるだけなんだ。自分で、望んで勇者になったわけじゃない。こんな俺で、いいのか……」

そっか。今まで、あんまり優斗と深い関わりを持ってなかったから分からなかったけど、優斗も優斗なりに、悩んでたんだ。ただのハーレム系主人公勇者じゃなかったわけだ。



「私は、それでいいと思うけどな」

「そう、かな」

「優斗は、凄く頑張ってる。勇者って役目からも逃げないし、皆の前では、頼れるリーダーとして、良くやってくれてると思う。でも、一つだけ文句を言わせて欲しい」

「何を？」

「優斗は、周りの人の事を考えすぎてる。ちょっとは自分のことにも、目を向けた方がいいんじゃないかって、そう思う。だって、今の悩みだって、結局は皆のためを思ってることですよ？ 自分が責任持たないとか、どうしてもそっちの方向性で考えちゃってる。優斗は、よく頑張ってる。皆と釣り会えるくらいに。それは私が保証する。優斗は、偉い。いい子」

俺はそう言いながら、少し背伸びをしながら、優斗の頭を撫でる。

「く、クロエ……？」

「だから、たまには周りを頼ってみてもいいんじゃないかな。優斗だって、普通の男の子なんだし。皆のリーダーだって、誰にも頼らずに、一人でなんでもできちゃう方が異常だよ。だから大丈夫。むしろ私は、優斗が思ったより人間らしくて、好感持てた。誰にも頼らずに、一人で何でもできるっていうのは凄いいけど、でも、私は、優斗には、もつと皆を頼るってことを覚えてほしいって思う」

「クロエ……………」

「私だったら、勇者って役目放り出してどこか遠くに逃げてるかも。でも、それくらいでいいんだ。優斗だって、辛かったら逃げてもいいと思う。逃げることは、恥ずかしくない。皆を守るのと同じように、逃げるって言うのは、自分を守ることなんだから」

「そっか。ありがとうクロエ、少し気が楽になった」

「ううん。こちらこそ、ごめんね、偉そうなこと言っちゃって」

少し説教じみたことを行ってしまった気がする。俺はちよつとだけ後悔するも、優斗の表情を見て、やっぱり言ってみて良かったのかなとも思う。

だって、優斗の表情からは、悩みだとか、そんなもの全部吹っ飛んでいて。

清々しいほどにスッキリしたかのような顔をしていたから。

ところで、優斗の頬が少し赤くなっている気がするんだけど、もしかして熱でもあったのかな？

コケコツコー  
!!!!!!

勇者パーティーの休暇最後の日。

俺達勇者パーティーは、現在カカエ姉さんの実家へとやってきていた。

何でも、決着をつけないといけないことがあるらしい。マコは用事があるみたいで、今回は同行してきていないが、代わりにアルトがついてきてくれている。

といっても、流れで何となく合流しただけで、アルト自身はカカエの実家に用はないらしいが。

「ひえーすつごい豪邸」

カカエ姉さんの実家を見て、アルトが感心したかのようにそう呟く。

実際、カカエ姉さんの家はかなり豪邸だ。正面には立派な門があり、側にはおそらくこれから勇者パーティーの屋敷内の案内をしてくれるであろう執事らしき男の人が立っている。

「貴族だったんだ……」

どうやら、カカエ姉さんは貴族だったらしい。他のパーティーメンバーは知っていたらしいが、俺は初耳だ。そういえば家名がないのは実家と縁を切ったから、とか言ってた

気がする。

決着を付けようとしたことは何なのか。カカエ姉さんが抱えているものは何なのか。それがこれから、明らかになる。

俺は、意気揚々と正門を……。

「クロエ様については、お屋敷への入室が許可されていませんので、お引き取り願います」

あの……。

出禁、くらっちゃったあ……。



「にしても、何でクロエちゃんが出禁なんだろうな。ちゃんと正式な勇者パーティーのはずなのに」

カカエの屋敷に入れなかった俺だったが、そんな俺を見かねてか、アルトと一緒に外に残っていてくれることになった。持つべきものは友だね。

優斗は『俺はクロエと残る』と言ったアルトを見て、何とも言えない表情をしていたが、まあ多分、勇者パーティーには男がいないから、自分以外の唯一の男であるアルトと一緒に来てくれないのは不満だったのかもしれない。

実際、パーティーのリーダーの筈なのに、俺と一緒に残ると言ったアルトを見て、『じゃあ俺も残る』とか言い始めたくらいだ。アルトの事好きすぎないか？

もしかしたら、ハーレムパーティーで男1人だけっていうのはかなり疲れるものなのだろうか。

それにしても……。

「アルト、何で急に“ちゃん”付けで呼ぶようになったの？」

「いや、特に理由はないよ。まあ、元々はちゃん付けで呼んでたし、強いて言うならその頃の癖かな」

「そっか。でも、えっと、正直俺は、アルトと、その、仲良いつて思ってるからさ、でき

れば気さくに呼び捨てで呼んで欲しいかなって……」

正直、ノエルと同じぐらいには、アルトのことは仲の良い友人だと思っている。だって、前世のことだって話してるし、2人で遊びに行くことだってよくある。

「確かに……恋人同士だったら呼び捨てで呼ぶもんな……なら呼び捨ての方が……」

アルトは何やらボソボソと呟き始める。呼び捨てにすることはそんなに難しいことだったのだろうか。いや、そんなはずはない。実際、俺の前世をカミングアウトして以降はアルトは呼び捨てで呼んでくれていたし、呼び捨てのハードルは低い筈だ。

それとも、もしかしたら嫌われてしまったとか？

何か気に触ることでもしてしまったのだろうか。俺のことが嫌いになってしまったから、呼び捨てで呼びたいと思わなくなってしまったのだろうか。

「ねえ、アルト。もしかして、俺のこと……」

「え？ い、いや？ なんな、何の話だ!？」

アルトは俺の言葉に、明らかに動揺したかのような様子を見せている。

この反応、もしかや……。

本当に、俺のことが嫌いになってしまったのだろうか。

もしかしたら、失恋したアルトに、慰めデートだとか言い出したのが、アルトからし

たら上から目線に感じたのかもしれない。

鬱陶しい奴だと、思われてしまったのだろうか。

もし、そうなら……。

「そ………つか。今までごめん……」

「…クロエ？」

「嫌いな奴相手にするのは、しんどかったよね。ごめん。こつちが勝手に仲良いって勘違いしちゃってた」

「は？ え、待て待て待て！ 何の話だ!？」

「本当に、ごめん。これからは、気をつけるから……」

「違うぞ！ 絶対に違う。クロエ、多分今誤解してるって」

「？ 何が違うの？」

「いや、だって俺はクロエの事嫌いじゃないし。む、むしろ、す、す………」

むしろ好きだと、そう言いたいのだろうか。それにしても詰まり過ぎだし、やっぱり無理して好きって言おうとしてるんだろう。

「ごめんアルト。無理しなくていいから。別に、アルトに嫌われてても、つらくなんて………ない………から………」

何だか、目頭が熱くなってくる。

そうか、自分では気づいてなかったけど、いつの間にか、アルトの存在は、自分の中で大きなものになっていたらしい。

実際、暗殺者やってた頃は、メンタルズタボロだったし。

今こうして安定してるのは、ノエルやアルト、それに勇者パーティの面々のおかげだったんだろう。

中でもアルトは、唯一の男友達と言っていていい存在だし、前世の性別を考えれば、これほど気のおける存在はいない。

そんなアルトに、嫌われているとなったら……………。

「ごめん。泣かせるつもりはなかった。けど、俺、本当にクロエのこと嫌いじゃないし、むしろ好きだから。だから、泣かないでくれ」

「はうっ……い」

急にアルトに抱きしめられて、俺は変な声を出してしまふ。

「その、好きなんて言うのは、ちょっと気恥ずかしいだろ？ だから、言いつらかっただけで……………。えーと、本当に俺、クロエのことは好きだから」

確かに、恥ずかしいと思うのはわかる。

何なら、今こうやって好きだと言われている俺の方も恥ずかしいと思ってるくらいだ。外から見れば、俺の顔面は真っ赤なりんご状態だろう。



ただの友達に対して、好きだとか何だとか言うのは少しハードルが高いかもしれない。  
い。

だったら……。

「アルトは、俺のこと、嫌いじゃない？」

「当たり前だ。嫌いだったら、わざわざ一緒に残るなんて言わないよ」

「アルトは、俺のこと友達だって、思ってくれてる？」

「うっ、それは……そう、だな……俺とクロエは友達だ。……今は、まだ……」

「そっか……。よかった」

最後の方は聞き取れなかったが、どうやらアルトは俺のことを友人として認識してくれているらしい。

にしても、俺、こんなに重い人間だったっけ？

やっぱり、暗殺者時代にメンタルやられてるせいなのかな。アルトやノエルに嫌われてるつてなったら、正直辛すぎて生きていけないまでである。

でも、よかった。アルトは俺のこと、嫌いじゃないらしい。うん、嫌いな相手にわざわざハグなんてしないだろうしね。

「やばい……抱きしめちゃった……心臓バクバクする……やばい……」

「アルト」

「え？ あ、ああ！ な、何だ？」

「ごめん。変なこと言い出して。今日のことは、忘れていいから」

流石に、友達同士でハグというのは、一応異性同士だし、あまりよく思われないう。まあ、本音を言うと、泣き出しちゃったのが恥ずかしいから忘れて欲しいというのがそうなんだけど。

「恋人同士でイチヤイチヤ、かー。いつの間にそんなに呑気な子になっちゃったの？」

俺とアルトの2人つきりだと思っていたが、どうやら周囲には人がいたらしく、俺とアルトは恋人同士に見えたらしい。まあ、男女で、ハグし合ったらそう思われても仕方ないよな。

でも、今の声、どこかで……………。

俺は、声の主の方へ顔を向ける。そこには……………。

紫色の肌を持ち、頭に大きく捻れた真つ赤な角を持った魔族がいた。

しかし、肌の色や角以外は、俺にとって、とても見覚えのあるもので……………。

「セツ……………ナ……………」

「久しぶり、クロエちゃん」

暗殺者時代同僚 昔の友人が、魔族となつて、俺に気さくに話しかけていた。

## 外出禁止令!! 良い子はお家で遊ぼう!!

「こちらが、噂の東の国の勇者様か。うちのカカエが世話になったな」

優斗達東の勇者一行は、カカエの実家である、ルシフェル家へと赴いていた。

ルシフェル家は公爵家の貴族家系で、ムレーハ王国建国当初から存在している最古参の貴族でもあり、王族に最も近い貴族とも言われている。

そして、優斗達は今、そんなルシフェル家の当主、サターンⅡルシフェルという男と対面していた。彼は豪華な椅子に豪快に座っており、その様子はまるで、勇者一行よりも俺の方が偉いんだぞ、と主張しているのかと感ぜられるほどのものであった。

ちなみに、マコが今回優斗達と共に来なかった理由として、サターンという名前を馬鹿にしたからというのもある。当主であるサターンに対して、『良い歳こいてサターンはダサイ』と表明してしまったことよって、ルシフェル家を出禁になってしまったのだ。まあ、自分のことは棚に上げ、他人のセンスを馬鹿にするのは良くないだろう。ましてや名前は親からの授け物なのだから、馬鹿にされる筋合いはないだろう。

「今さら何の用? 縁なら切った筈だけど」

そんなサターンに対して、カカエは突き放すような物言いで話しかける。会話の雰囲気

気から察するに、親子仲はそれほど良くないようだ。

「ああ、縁は切った。だが、親としてはお前のことが心配だな。勇者パーティなんてものにいたら、命がいくつあっても足りない」

サターンは優斗の方を横目で馬鹿にするように見ながら、そうぼやく。

その光景は、娘を心配している親というよりも、ただ『勇者パーティ』を馬鹿にしただけのようだった。

「ボクのパーティのこと、馬鹿にしなさいで貰える?」

「馬鹿になどしておらんよ。ただ、低俗な生まれの元暗殺者なんてものがパーティの一員になっているなんて聞かされたら、親としては気が気でなくてな」

勇者パーティに入っているクロエが元暗殺者であるということは、国民には知らされていない。もし元暗殺者がパーティに入っているなんて知れたら、国民の勇者パーティへの信頼がなくなってしまうためだ。しかし、サターンはその事実を知っている。当然と言えば当然だろう。彼は王族に最も近いと言われている貴族だ。クロエの件は、彼にも情報共有されている。

そんな彼の言い分には、特におかしな点は見受けられない。クロエが育ってきた環境はあまり良いと言えるものではなかったし、クロエは教育を受けていない。そんな彼女のことを危険視する声は有力貴族の中でも多く見受けられ、中には暗殺者を雇ってクロ

工を殺害しようとした者までいたくらいだ。

だが、カカエにとつては、サターンの発言は許せるものではなかったらしく。

「ボクのパーティーメンバーを馬鹿にするな!!」

そう言つて、サターンに掴みかかるカカエ。周りにいた優斗達が一瞬止めようとするも、掴みかかられたサターン自身がそれを手で止める。

「やはりお前はルシフェル家には相応しくないな。すぐに手を出すその野蛮さ、淑女らしくない言葉遣い。まったく、恥ずかしい限りだ。少しは妹のシエを見習つたらどうだ？」

激昂するカカエに対して、サターンは一切取り乱すことなく、冷静にそう告げる。

その様子はまるで、お前は子供で、私は大人だ、と主張しているかのようで、実際、感情的になつてしまうカカエはまだ精神的に幼いところがあるのかもしれない。

「そうだね。ボクは貴族に向いてない。そこに関してはボク自身認めているし、申し訳ないと思つている。もちろん、シエの方がよっぽど優秀だつていうことも。でも、それと勇者パーティーとは関係ない」

「そうだな。関係ないとも。お前はもうルシフェル家の人間でもないことだしな」

「だつたらもういいでしょ。あんたにボクの人生についてどうこう言われる筋合いはない」

「そうか、残念だ。お前の意志が変わらないというのなら、私から言えることは何も無い」

「じゃあ、本当にボクにはもう干渉してこないんだね」

「ああ、約束しよう。好きに生きればいい」

カカエとサターの会話は、険悪な雰囲気割にあつさり結論を迎える。カカエ自身、あまりにもあつさりとした父の対応に驚いているくらいだ。

「ユウト、帰ろっか。ボクの用事はもう済んだから」

「本当に良いのか？」

「うん。気持ちの整理はついたからね」

優斗達勇者一行は、カカエのそんな表情を見て、ルシフェル家の人々に挨拶をして帰ることにした。

執事の男に連れられ、玄関まで向かう優斗達だったが……………。

「……………開かない？」

玄関の扉が、開けようとしても微動だにせず、屋敷から出ることができない。

「おや、おかしいですね……………さつきまで開けた筈なのですが……………」

執事の男も、玄関の扉が開かないことに困っている様子だ。つまりこれは、勇者パーティに対するルシフェル家からのイタズラというわけでもないらしい。

「はわわっ！ 今調べたら、結界はられちゃってます！」

そんな様子を見てか、エレナが周囲を探知し、玄関の扉が開かない原因を、魔法の観点から調べた。結果、どうやら何者かによつて張られた結界によつて、ルシフェルの屋敷から出ることができない状態らしい。

「誰がこんなこと……」

「勇者パーティをルシフェル家の屋敷に留めておきたいと考えた何者かの犯行つてことになるね。まあ多分、サターンホクの父がやったんじゃないかな。やけにあっさり引き下がるなあとは思っていたけど……」

ルシフェルの屋敷は、ムレーハ王国の内地中の内地にある、極めて安全な場所であり、この場所に魔王軍が侵攻することは不可能だと言っても過言ではない。つまり、魔王軍によつて張られた結界という線は薄い。そして、ルシフェルの屋敷全体に結界を張れるということは、それなりの実力者による犯行だということだ。そして、結界が張られたのはおそらく勇者パーティがルシフェル家の屋敷に入った後。

つまり………。

「あの人は大して魔力を持っていない。結界を張るのは不可能だ。屋敷内にも、結界を

張れるような人はいなかった。犯人は多分、外にいる」

「じゃあ、私達ここから出られないってこと?」

「……そうなる」

優斗の言葉に、セリカが反応する。もし屋敷内に犯人がいるのであれば、犯人を懲らしめて結界を解除させればいい話だが、外にいる場合は、犯人が結界を解かない限り、屋敷内から出ることが不可能だからだ。

結界を張るには、入念な準備と膨大な魔力が必要だが、その分結界を張った後は、どんなに強力な魔力でも解除することが不可能になってしまう。結界を解くには、結界を張った張本人が結界を自身で解除するか、結界を張った者の魔力が枯渇して結界の維持に魔力を割けなくなった場合のみだ。

「何をやっているのかね」

玄関で屯している優斗達の様子を、執事の男によって伝えられた家主であるサターンも、わざわざ玄関まで出向いて様子を見にきた。

そして、優斗達の間を通り、玄関の扉のドアノブに手をかけ、実際に開かないことを確認する。

「やはり、嵌められたな」

そして、ボソリと、勇者一行にも聞こえるぐらいの音量で、そう呟く。



「その言い方、何か心あたりがあるかのような言い方ですね」

「心当たりも何も。こんなことができる人間など、決まっているじゃないか」

サターンは、まるで当たり前のことを言うかのように、告げる。

「結界を張ったのは、勇者パーティという肩書きだけにつられてパーティに加入した下賤なハイエナの、クロエとかいう元暗殺者のガキに決まっている」

「そんなわけ……!」

サターンの発言に、セリカを筆頭に納得いかないような表情を見せる勇者一行だったが……。

「悪いが、王にも連絡は既にとつてある。勇者パーティ一行で元暗殺者のクロエは、国家反逆の疑いがある、とな」

「クロエが国家反逆なんて考えるはずがないです。取り消してください」

「そうかね。勇者の君が言うのなら、そうなのかもしれない。しかし困ったなあ。結界を張られてしまつては、今から王に連絡をとることはできません。このままでは、クロエは国家反逆の罪で囚われてしまうな」

サターンは、わざとらしく困ったかのような仕草を取りながら、告げる。

「クロエの疑いを晴らしたいのなら、結界を解いてもらわないとね?」

そう言ったサターンの表情は、イタズラに成功した子供のような、満面の笑顔だった。

## 後悔しても後悔しても、過去は変わらない

カカエ姉さんの屋敷に入れなかった俺とアルトの目の前に現れたのは、俺と同じように、世界一の殺し屋が取った3人の弟子の内の1人、セツナだった。

「セツナ、何で魔族に……」

「人、殺したかったから」

「え？」

「だから、人殺したかったんだってば。魔族だったら、別に人殺したって変じゃないでしょ？ だからなったの」

「セツナ、いつの間にそんな風に……」

「それはこっちのセリフだよ。いつの間にそんな色ボケするようになったんだか。後、私は元々こんなだよ。クロエちゃんやサツトくんが人殺しに抵抗があつたみたいだったから、私もそれに合わせてそれっぽく振る舞ってただけ」

片手に持つナイフをくるくる回しながら、何でもないことのように告げるセツナ。俺の知るセツナとは随分と違うように思える。少なくとも、昔の彼女は、そんなことを言うような子ではなかった。後ちなみにやっぱリアルトと恋人関係であると勘違

いされてるらしい。アルトとはただの友達なだけだなあ…。

話を戻すが、俺の主な仕事は貴族の暗殺だったのに対し、セツナの仕事は暗殺者の暗殺だった。そもそも担当している分野が違う。だから、もしかしたら俺の知らないセツナの顔があつたのかもしれない。

ちなみに、サツトというのは俺やセツナと同様世界一の殺し屋の三人の弟子の内の一人のことだ。

3人でいた頃は、暗殺者をやっていた時代では一番楽しかった。

3人とも、出身地こそ違ったが、境遇は似たようなものだった。だから、お互いに仲間意識というのは強かったし、絆も深まった。

だが……。

「敵になるなら、容赦はしない。アルト、気をつけて。はつきり言って、セツナは最も暗殺者に向いていると言つても過言じゃないくらいに、暗殺者としては優秀だから」

俺は村を襲われ、大人達に攫われてもなお取り乱さなかつた冷静さが評価されて暗殺者になるに至つたが、セツナは攫つた本人ですら気づかなくなるほどの影の薄さや、息の潜め方が評価されて暗殺者になった。そう、つまりセツナの強みはその隠密性だ。

大体、魔族には侵入不可能と言われている東の国の王都の、有力貴族の屋敷周辺にまで潜入することができている時点で、セツナの異常性は明白だろう。

「……いいんだな」

「うん。っていうか、手加減できる相手じゃない」

何せ相手は暗殺者を暗殺する暗殺者だ。太った貴族を暗殺するだけの俺とは違い、プ口の暗殺者に気づかれずにその首を掻き切ることができるのがセツナだ。

油断すれば、気づいたら背後に回られて首を掻つ切られていた、なんてこともあり得る。

「アルト、後ろ見張ってて」

俺はアルトに背後の警戒を頼む。本来なら、勇者であるアルトが先陣を切って戦うべきだろうが、相手はセツナだ。今回に限ってはそうはいかない。少なくとも、アルトがセツナの戦い方の癖などを理解できるくらいには俺がセツナの相手をして、アルトに戦闘を見せてやった方がいい。

俺は様子見として、とりあえずナイフを投擲する。

当然、こんなものがセツナに通用するはずもない。

「雑だね」

うん。思ったよりもはやい。俺がナイフを投擲したその瞬間には、既にセツナは俺の頭上へとやってきていた。魔族になったことで、以前よりも身体能力が上がっているのだろう。前までなら、速度だけで言えば俺でも視認できるレベルだったはずなのだか

ら。

そんなセツナに対し、当然俺もその場から退避し、次の攻撃に備えるが。

「痛っ……」

左太ももにかすり傷。いや、ナイフで切ったような痕がある。ということは、セツナの攻撃によるものだろう。俺がセツナを視認し、その場から退避しようとするその寸前に、おそらくナイフを投擲するなどして俺の太ももに傷をつけたのだろう。俺は気づけなかった。

「クロエっ！」

「アルト、大丈夫だから、セツナの動き見て！」

アルトに今出てこられても、足手纏いになるだけだ。今のセツナは、勇者の力だけでゴリ押しできるような相手ではない。何なら、この前のオニンニクという四天王よりも恐ろしい存在だ。

オニンニクは千・ノーウという『十拝臣』の1人の村全体の洗脳によつて自身の力にバフをかけていたからこそ優斗ですら苦戦する強敵へと化していたが、セツナは多分素の状態でも優斗を苦戦させることができると思う。

優斗ですら苦戦する相手を、アルトが相手できるはずがない。勿論、アルトを侮辱しているわけではない。ただ、事実として敵わないのだ。現状この場でセツナの相手がで

きるのは、セツナの戦闘の癖や手数を知りつくしている俺くらいだろう。

「クロエちゃんつてき、よくそんな風にいられるよね」

「落ち込んでいたって何も改善しない」

俺とセツナは、殺し合いを繰り返しながらも、言葉を交わす。久しぶりの再会だし、昔の友人と話したいというのはそれほどおかしいことではないだろう。状況が状況でなければの話だが。

「セツナ、人を殺したいって、本当にそう思ってる？」

「思ってるよ。この世界の人間全て、殺してやりたいって。私がこうやって生きる道しか用意できなかった屑どもを、全員蹴散らしてやりたいってさア!!」

セツナはそう言って、狂気的な笑みを浮かべながら俺に攻撃してくる。さつきよりもヒートアップしているような気もする。やっぱり、彼女はどこか狂ってしまったているのかもしれない。元からそうだったのか、それとも、暗殺者として働いているうちに、その精神を壊してしまったのか。

多分、後者だろう。彼女の発言には、この世の人間に対する恨みのようなものがあるもっていた気がした。

自分が暗殺者としてしか生きることができなかったことが、辛かったと、そう主張しているような気がした。

セツナもまた、俺と同じように被害者だったのだ。

実際、彼女も俺と同じように村が襲撃に遭ったことが原因で暗殺者になるに至ったという話を聞いたことがある。

彼女が暗殺者を殺す暗殺者に向いているというのは、自身の置かれている状況を理解し、村を襲撃した連中に媚を売ったその従順さからだろう。彼女ならば、裏切り者の暗殺者の始末に最適だろうと、そう判断されたのだ。

けれど、それだつてセツナがやりたくてやっていたわけじゃない。だつて、仲間であるはずの暗殺者を、自分の手になけなければならぬことだつてあるのだから。

「セツナ……………」

「私を哀れんだ目で見ないでよ。私、クロエちゃんのこととは好きだけど、同時に大嫌いでもあるの」

「セツナ、今からでも……………」

「そういうところだよ。嫌いなところ」

「クロエちゃん、きつと私のこと異常だ、おかしい、つて思ってるだろうね。けど、クロエちゃんは気づくべきだよ、本当に異常なのは……………自分だつて」

俺が、異常？

……そうだろうか。俺は確かに、たくさんの人を殺したし、そのことについて躊躇はしてこなかった。けれど、感情がなかったわけじゃない。実際に、俺はアンジエのことを殺し損なった。本当に人間としておかしくなってしまっているのだとすれば、俺は今頃アンジエを殺して、暗殺者を続けていたことだろう。

「何で、気づかないのかなあ……」

俺の様子を見てか、セツナはイライラとした口調で呟く。気づかない、何に？

俺は何か忘れているのだろうか。俺とセツナの過去に、何かある？

そんな筈はない。俺とセツナ、サツトの3人でいた頃のこととははつきり覚えているし、その頃に何か異常な事態に陥ったという覚えもなければ、俺がおかしな行動をした覚えもない。むしろ、3人で固まっていた時におかしなことをしていたのはセツナの方じゃないだろうか。まあ、それだって遊びの一環でやっていたことで、おかしいと言えるものではないのだけど。じゃあ、何を……。

「分からないみたいだから、教えてあげる。クロエちゃん」



「大量に人殺しといて、どの面下げて勇者パーティーに入ってるの、この人でなし」

## 安殺

「本当に、理解できない……………人を殺しておいて、なんでそんなにのうのうと生きていられるの？ どうして、そんなに楽しそうにしていられるの？」

セツナは、苦しんでいるかのような声で、俺に問うてくる。

「わからないよ……………私は、ずっと夢に見る。自分が殺した暗殺者仲間のこと。ずっと、脳裏に響いているの。裏切り者、って、私を罵る声が!!」

セツナのナイフを振る動作が、セツナの感情が昂つていくと共に粗雑なものになっていく。

暗殺者の、洗練されたものではなく。普通の少女が、ただ己の中にある感情を、そのまま吐き出したただけかのような。

自分の憎しみや怒りを、ただ全てまっすぐに乗せたかのような、そんな攻撃。

プロの暗殺者にあるまじき行為。けれど、それだけ、それだけ俺の存在は、セツナを苦しめてきていたのかもしれない。

「私、魔族になつてからも、クロエちゃんの様子見に来てたんだ。初めは心配だった。ただそれだけだった。なの!!」

セツナはナイフを放り投げ、俺の胸倉を挿んで叫ぶ。

「人を殺したのに、あんなに楽しそうで……。私には、クロエちゃんが理解できない……。怖いって思った。人を殺して、平然と生きていられるのが……。私は、魔族になってもまだ、悪夢から目覚めることができないでいるのに!!」

セツナの目から、無数の涙が零れ落ちる。

きつと、ずっと悩んできたのだろう。暗殺者として生きてきたことに。

多分、魔族になって人を殺したかったっていうのも、嘘なんだろう。

本当は、そうやって誤魔化したかっただけだったのかもしれない。

魔族になれば、人殺しを何とも思わなくなるかもしれない。そんな期待を持って、魔族になったのかもしれない。

「確保……」

後ろから、アルトがセツナを拘束する。

暗殺者のセツナなら、こうはいかなかった。

セツナは、途中から、暗殺者ではなく、ただの少女に成り下がったのだ。暗殺者のように無感情にただ仕事をこなすのではなく、感情のままに振る舞い、その内にある本音を曝け出した。だから、こうも簡単にアルトに捉えられてしまったのだろう。

いや、元々、俺を殺す気なんて、なかったのかもしれない。

「ねえ、クロエちゃん」

セツナは、力のない声で、俺に話しかけてくる。

目は死んだ魚のようで、まるで光がない。

そんな彼女が、俺に望んだのは……。

「殺して」

殺人。

いや、彼女は魔族だから、殺『人』ではないのかもしれない。

しかし、命を奪う行為であることには変わりない。

「ごめん。そのお願いは聞けない。もう、人を殺したくはないから」

「なんで………なんでよ。人を殺しても何とも思わないんでしょう？ 私のこと殺しても、平然と生きていけるんでしょ？ だったら、殺してよ……。魔族になってまで、私は暗殺者私を忘れようとしたのに……。そこまでして、それでも無理だったのに……。どれだけ足掻いても、一生私は幸せになれないのに………」

そっか。

これが、普通なんだ、きつと。

普通の少女が、暗殺者なんて重荷を背負わされてしまったら。

人を殺してしまつたら。

もうまともに生きていくことなんて、本当はできないんだ。やつと分かった。俺の異常性。

確かに俺は、暗殺者をやっている時は、精神的にまずい状況ではあった。それこそ、追い詰められて自死を考えるほどに。

でも、今はそうじゃない。

勇者パーティに入って、アルトやノエルと出会って。

過去のことなんて忘れて、のうのうと暮らしてた。

そう。俺は、異常だ。

あんなに悲惨な過去があつたというのに、俺はその過去をあつさり乗り越え、平然とした顔で何気ない日々を過ごしてしまっている。

俺は多分。自分の罪を本当の意味で認識していない。

前世の存在、多分、それが大きいだろう。異世界にいる自分は、自分ではあるけれど、心のどこかで、まるで他人かのように思っている。そう、ゲームでもしているかのような感覚なのかもしれない。

だから、俺の心は崩壊することはなかった。

けど、そんな俺の姿を見たセツナは、どう思うだろう？

自分と同じ境遇なのに、平然と生きている人間を見れば、どう思うだろうか。

自己嫌悪？

嫉妬？

あるいは両方か？

でも間違いないく、ギリギリのところまで保っていた心の均衡を崩すのには、十分な情報だったのかもしれない。

つまり、今セツナがこうなってしまうているのは、俺の責任かもしれない、ということだ。

今ここでセツナを殺さないという選択肢をするのは簡単だ。

けど、本当にそれでいいのか？

セツナは多分、これからも一生苦しみ続けることになる。

仲間を殺したことを、一生引きずって生きていくことになる。

きっと、今の俺は彼女にとって、救いでもあるんだ。

死にたい、けど、自分じゃ死ねない。かと言って、他人に殺してもらおうとして、相手も自分と同じように、誰かを殺してしまったことへの罪悪感を持つてしまうかもしれない。そう思うと、彼女は誰にも言い出せず、一生苦しみながら生きていくしかなくなる。

俺ならば、そんな心配はしなくていい。

少なくとも、セツナはそう思ってる。なら……。

「クロエ……？」

俺は、セツナがさつき捨てたナイフをその手に取る。そして……。

「おい、よせー！」

そのまま、セツナの首に、そのナイフを突き立てた。

少女の体が、その場に倒れ込む。

首元から大量の血が溢れ出し、地面を真っ赤に染め上げる。

魔族でも血は赤いんだなあ、なんて、どうでもいいことを考えながら、セツナだったものを見下ろす。その表情は、安らかではあるものの、どこか息苦しさを感じさせるようでもあった。

殺した。それも、あっさり。

でも、今のところ何も感じていない。

いや、少しの寂しさと、なんとなく虚しさも感じる気はする。けど、精神的に追い詰められているかというのと、そんなことはない。

「あはは……そっかあ……」

やっぱり、そうだったんだ。

俺は、この世界の人間の命を、軽視している。

そうだったんだ。

俺は、なるべくして暗殺者になったのかもしれない。

そうならざるを得なかったのではなく、そうなるのが当然だった。

「アルト、優斗達に伝えておいて」

「何を……?」

「勇者パーティー、抜けるってさ」

「え、ちよ、待て、クロエ!!」

『大量に人殺しといて、どの面下げて勇者パーティーに入ってるの、この人でなし』

そうだ。セツナの言う通りだ。

どの面下げて、俺は勇者パーティーに入ってたんだろ。

人殺しのくせに。

人のことを殺しても、何も感じないくせに。

きっと、アンジエのことを殺せなかったのも、アンジエのことを1人の人間として見ていたんじゃないかと、何かの物語のキャラクターとしてしか見ていなかったんじゃないだろうか。その上で、アンジエという幼い少女のキャラクターを殺すことに、抵抗を覚えただ俺が、少しだけ感情を肥大化させて、嫌だどごねただけなんじゃないだろうか。

優斗のことも、勇者ってキャラクターとしてしか見ていないんじゃないだろうか。

カカエ姉さんも、エレナさんも、セリカも、マコのこと、全員、勇者パーティーの一



員という属性のキャラクターとしてしか見ていないんじゃないか。

もしかしたら、アルトやノエルに対しても、そう考えているのかもしれない。  
疑え出せば、止まらない。

俺は、どこまでが人間なんだろう。

どこまで俺は本気で生きているのだろうか。

俺は、この世界の住人足り得ているのだろうか？

考えたくない。

自分の醜い部分を、見たくはない、知られたくはない。

この世界の住人と関われば関わるほど、俺はこの世界の人達をちゃんと見ていないって気付かされてしまうんじゃないだろうか。

考えたくもない。

だから、俺は……………。

「じやなやんや」

一生孤独でいい。

## ボクは勇者パーティーが好き

ボクは、昔からルシフェル家の人間として相応しく振る舞うよう、厳しく教育されてきた。

男の子のように外ではしゃいで遊び回れば、三日間家に閉じ込められ、只管勉強、所作のレッスンを、常に先生や侍女の目に晒されながらこなすことになる。何もしなかったとしても、さつき言ったメニューに加えて休憩で少し外の空気を浴びに行くのが許される程度のものであった。

でも、それが当たり前だと思ってきたから、家のために、政略結婚の道具になるのが、ボクの運命なんだって思ってたから、受け入れてきた。

そんな時、ボクはムレーハ王国の王宮に赴くことになった。王子との邂逅、他の貴族との交流。

なんてことない。いつものように事務的にこなしていた。

けど、そんな時、ボクの目に止まったものがあつた。

勇者の冒険譚。

図書室にあつた、勇者の冒険についてが記録されたものだ。

ボクは何気なく、その本を取って呼んだ。

その世界は、自由だった。

もちろん、簡単な旅じゃないことはわかってる。

けど、ボクに取っては何もかも未知のものばかりで、心惹かれることしかなかった。中でも、ボクに大きな影響を与えたのは、勇者パーティの1人である、カレナだ。

彼女の一人称が、ボクだったことが、ボクはとも衝撃を受けたのだ。

今まで自分の中で築いてきた女性はかくあるべき、という像が、音を立てて崩れ去っていく気がした。

その時からだろうか、父に対して、反抗するようになったのは。

一人称も私からボクにしたし、まるで勇者の冒険譚に出てきたカレナのように振る舞うようになった。

当然父は怒った。けど、ボクは楽しくて仕方がなかった。

まるで翼を得た鳥かのような気分だったから。

そうしてボクは、優斗がこの世界にやってきたと同時に、彼に声をかけた。

勇者パーティ最初の仲間になるうって思ってたからね。実際、カレナも勇者の第一の仲間として勇者パーティに加入してみたみたいだったし。

まあ、グイグイ行き過ぎたせいで優斗に警戒されちゃって、ボクが勇者パーティに加

入したのはエレナとセリカがパーティに入った後になっちゃったんだだけだね。三番目だ。ありやりや。

それで、そこからマコが加入して、アンジエが入って、そしてクロエが勇者パーティに来た。

本当に、皆と一緒にいる時間はとても自由で、楽しくて、退屈しなかった。

エレナもセリカも、マコもアンジエも、そしてクロエも、皆個性的で魅力的だ。だから、認めさせなきゃいけない。

あの父に、ボクの、ボクたちの勇者パーティを。  
ボクは父のいる部屋を開け、部屋に入る。

さあ、しようぶ……だ……。

「うっ……ひつぐ……ぐすん」

「は？」

ええ……？　なんか泣いてるんだけど……。なんで？

「うえ……ひつぐ……かかええええええええええ!!　いかないでくれええええええええええ!!」

「うわ……」

「ん？　あつ。か、かかえ……んん!!　な、なんだ？　何か用か？」

「いや、流石に無理あるでしょ」

あれ？ ボクの父つてもしかして親バカだったりする……？



「つまり、ボクに幸せになって欲しかったから厳しく教育してきた。けどそれで反抗するようになって、家出までしちゃったから寂しかったと？」

「うん」

「はあ……。でも、だからってボクのパーティメンバーを馬鹿にするのは違うでしょ……」

「うっ……。それは……。すまん……」

子供か！

なんなんだこの父は。

昔はあんなに嫌いだったのに、こんな姿見せられると、困るじゃないか。

いや、昔は嫌いだった、は語弊があるかもしれないね。

正直いうと、勇者の冒険譚を読むまでは、ボクは父のことは結構好きだったんだ。

まあ、ボクも心の中じゃ、父との決別を受け入れてなかったのかもしれない。

だから案外、父に対する嫌悪感を振り払うのも容易だったのかもしれないね。

「カカエのパーティメンバーには、直接謝罪する。けど、かかええ……。たまには帰ってきてくれえ……!!」

「わかった。わかったから。はあ……。つたく。昔の威厳溢れる父はどこへ行ったんだか……。」

てか多分この父、結界で閉じ込められたって時に満面の笑みを浮かべてたけど、あれ多分ボクと一緒にいれる時間が増えて嬉しかったからなんだろうな。勇者パーティバカにしたのだって、元を辿ればボクを奪った勇者パーティを恨んでたんだろう。確かに娘の心配をして言った発言ではなかったわけだけどねえ。

つたく。本当に困った父だ。

「カカエ、結界が解けた。原因は外にあったみたいだ。出れるか?」

「あーうん。今すぐいくよ」

そしてどうやら、案外すぐに結界は解けることになったらしい。原因はなんだったん





ふう……。まったく。本当に親バカもほどほどにして欲しいものだね。仲間をバカにされたら、流石のボクも頭に來ちやうわけだし、バカにするにしてももつとこう、別のところにして欲しいものだ。

と、そういうえばクロエのことを相当待たせてしまったわけだし、謝罪の一つや二つくらい述べたほうがいいかもしれない。後、この際、仲間に感謝を伝えるようにしてみてもいいかもしれない。というか、さつきエレナ達には感謝の言葉を述べておいた。物凄く意外な顔をされたけど、ボクは皆のこと好きなんだよ？ 優斗にしか興味ないと思われてたのは心外だったよ。ボクは勇者パーティそのものが好きなんだからさ。

いやもちろん優斗のことは好きだよ？ 何度惚れ薬を作ってボクの虜にしてやろうかと思ったことか。

つと。そういえば結果が解けたのはクロエが結果をはった主を討伐したかららしい。さつき優斗から聞いた。その件も含めて、クロエには感謝しないとね。

つと、あれ？ 皆どしたの？

なんか雰囲気暗……。い……。

何これ……。

「死体だ。魔族の」

「人間にしか見えないけど……」

「ああ。元人間の魔族だ。それも、クロエの元暗殺者仲間の」

「えーと……。クロエは……?」

「……………」

優斗は黙り込んで、何も言わなくなってしまった。

というか、多分これ、クロエが殺したってことだよな。

あの子、人殺しなんて誰よりもやりたくないって思ってたはずなのに……。

いや、魔族なんだけど……。でもこの魔族は、クロエの昔の知り合いで……。

嘘でしょ。

こんな、ことになってたなんて。

ボクの、せい……?

ボクが、この屋敷にケジメをつけにやってきてしまったから。

ボクが、クロエをここに連れてきてしまったから。

だから、あの子にこんなことをさせてしまったのかな。

はは……。笑えないや。

勇者パーティが大好きで、ずっと今の勇者パーティを守っていききたいなんて、そう

思ってたのに。

「ボクが、壊しちゃったんだ……」

せつかく、父と仲直りしたというのに。  
ボクの心は、晴れやかになってはくれなかった。

久しぶりに会うと別人みたいになつてる幼馴染っている  
よね

「はい。それでは、報酬の110 Tトランスになります」

「……どうも」

勇者パーティを抜けてから、俺は元のソロの冒険者へと戻った。東の国でいると、優斗達に見つかる可能性が高いため、最近南の国を主な拠点として活動している。まあ、東の国にいても、王都に行きさえしなければ、滅多に優斗達と遭遇することはないだろうが、それでも、万が一ということもある。

だからこそ、知り合いのいない（南の国の勇者であるユリウスはいるが、正直そこまで面識があるわけじゃないから問題ない）南の国で活動することにした。

まあ、1人でも案外上手くやっていると。まあ、世界一の殺し屋の3人しかいない弟子のうちの1人なのだから、冒険者として活動して難なくやっつけてるのは当然と言えば当然なのかもしれない。ああ、そういえば、その弟子のうちの1人は俺が殺したんだった。はは……。

「クロエちゃん？」

もう、誰とも関わりたくない。

優斗とも、アルトとも、ノエルとも。

俺は俺の中にある『俺』が、この世界を俯瞰して見てしまっている事実を受け入れたくない。いや、違う。俺は、俺が優斗達のことまで『人』として見れていないのかもしれないって考えることが、怖くて……。

「ねえ、クロエちゃんだよね？」

だから、さつきから声をかけてくる存在にも、俺は気づかないふりをする。聞き覚えのあるような、ないような声をしている。多分、知り合いなんだろう。ノエルではないことだけは確かだ。まあでも、俺はもう他者と関わりを断ちたい。だから……。

「ねえってばー！」

後ろから袖を掴まれる。しまった……。普段ならこんなミスは犯さないんだけど、いけない。戦闘してる時は集中できるのに、こうして普通に歩いてる時は、まるで意識がどこかへ飛んでいってしまっているかのようで、ぼーつとしがちになってしまう。まあでも、捕まってしまったからには仕方ない。こんな場所で、急にナイフを取り出して相手の喉を掻っ切るわけにもいかないし。適当に済ませて、さつきとこの場を去ろう。俺はそう思い、背後を振り向き、相手の姿を確認して……。

「な……………んで……………」



手足が存在している。おそらくは義手義足なんだろうが、しかし、今の彼女はまるで昔あつた出来事を感じさせないようで……。

何だかまるで、村を焼き払われる前の彼女そのものつて感じだった。いや、少し違う。今の彼女は、無理して昔の自分を演じているように見えた。

「やつぱり、クロエちゃんの目は誤魔化せない、かな。気づいてるんでしょ？ 私が無理してらつて」

「うん……」

昔は村でも一番仲の良かった友人だったし、彼女の表情の変化には敏感なのかもしれない。けど、今更俺に、何のようなんだろう。昔、見捨てたことを恨んでいるのだろうか。それとも、もう一度友人として関係を構築したいと考えているのか……。

もしかしなくても、多分俺は、彼女に期待してしまっているんだろう。心のどこかで、後者であつてほしいと、もう一度友人になりたいと、そう思っている自分がいる。彼女となら、もしかしたら、俺はちゃんと『クロエ』としてこの世界に存在できるんじゃないかって、そんな気がして……。

「クロエちゃんが暗殺者止めた時にね、私も解放されたんだ。貴族の手から。国の保証とか、そういうのもあつて何とか暮らして行つてただけど、結局東の国に居続けてると、昔のこと思い出して辛くなるから、今はこの国にいるの」

「そう、なんだ……」

「昔はさ、クロエちゃんのこと、恨んでたんだ。あんなに仲良かったのに、あんなに一緒にいたのに、私のこと、見捨てちゃうんだって。でもさ、クロエちゃんがやらされてたこと、後から聞いて、私と同じように、クロエちゃんも苦しんでたって、そう気づいた」

「カヤ……」

「私、本当は今日クロエちゃんに会ったのも、たまたまじゃないんだよ」

「……どういうこと？」

「クロエちゃんも、結局勇者パーティで上手くいかなかったって聞いたから、なら、だったら。私と一緒に来ない？」

そう言ってカヤは、俺に手を差し伸べてくる。

心のどこかで、俺が求めていたものが、今、差し出されている。

元々俺は、暗殺者になる前にもっとオープンな人間だった。

カヤだけには前世のことも話していたし、外ではしやぎ回ったりもしてたし、それなりにこの世界の住民として生きていったつもりだ。

多分、俺がこの世界を俯瞰した目で見えるようになってしまったのは、きつと暗殺者になって、その時に自分の心が壊れないようにするためだろう。本当は自分でも分かっていた。そんなこと。



でも、だからこそ。

俺が暗殺者になる前に、関わってきた、カヤとなら。もしかしたら……。

「いい、の……？」

「いいの。むしろこっちがお願いしたいくらい。これは私の我儘なの。また昔みたいな関係に戻りたいっていう、私の我儘」

そう問いかけてくるカヤの目は、どこか不安そうで…。

もしかしたら、断られることを、恐れているのかもしれない。

「今まで俺がカヤの誘い断ったことあった？」

「へ？」

「別に、カヤと一緒になら、上手くやっていける気がするから、さ。だから、その、喜んで？」

「あはは！ 何それ、まるでプロポーズされてるみたいな言い方じゃん」

「ち、ちがつ！ いや、カヤだって、まるでプロポーズするみたいな言い方だったし、そうやって、俺は彼女と笑い合う。」

まるで、昔に戻ったみたいで。この時だけは、俺は、『クロエ』でいられる気がした。



「ここがこれから住むところだよ」

そうやってカヤに連れてこられた場所は、結構な豪邸っぽい家だった。一応、東の国からの支援があつたという話は聞いたけれど、ここは南の国だ。支援金だけでどうこう、つてわけにはいかないだろう。となると、この家を購入するための金は、カヤ自身で稼いだということになるわけだが、まさか、身売りとかしてないよな？

「カヤ、ちなみにこの家はどうやって」

「ん？ あー。国からの支援金だよ。流石に私じゃ稼げないからね」

カヤは何でもないように言うが、多分嘘なんじゃないかな？

はあ、でもいいや。もう彼女に身売りなんてさせないから。それでも俺は優秀な冒険者だ。これからは俺が稼ぐし、カヤに変なことさせるつもりはない。

「扉開けておくから、先入つてて良いよ」

「ほーい。お邪魔しまーす」

「先にリビング入つてて」

「カヤは？」

「ん、大丈夫。先くつろいでて」

部屋紹介とかしてほしいんだけど、まあいいか。少し待てばカヤも後から来るだろうし、先にリビングの様子を拝見させていただこう。俺はリビングの扉を開いて……。

「はっはっは。では、最近は少し違う道具を扱うことも考えているわけですな。頑なに一つの道具しか扱わなかった貴方が、珍しいものですな」

「いや何でも、その幼馴染らしいので。わしは容姿よりも内面や関係性など重点を置いているものでして。つと噂をすれば」

そこにいたのは、少し小太り気味な2人の男。どちらも下衆な笑みを浮かべながら、こちらを品定めするように見てくる。カヤから聞いた話では、ここにはカヤしか住んでいないし、これからも俺とカヤの2人で住んでいくって話だったんだけど……。

「ごめんね、クロエちゃん……」

ボソリと、俺の耳元でカヤの声が響く。

「おーカヤ。ご苦労。そちらがお友達かな?」

「はい、ご主人様。言われた通りお連れしました」

つまり俺は……カヤに嵌められた?

俺はこれから、この男達の相手をさせられることになるってことなんだろうか。

ナイフは、今手元にない。カヤから持たないように言われてたから、そういう道具は

今持ち合わせてない。

いや、でも、本当に……？

何で、カヤは俺のことを……。

「か、カヤ……？」

「クロエちゃんが悪いんだよ。あの時、私のことを見捨てたんだから」

「カヤ……何で……」

「私は手足もとられて身動きできないようにされて、体もたくさん汚されて……。今手足を付けさせてもらっているのは、お使いとか、そういう用事がある時だけ。基本私は逃げられない。そういう契約を魔法で結んでいるから。なのに、クロエちゃんは五体満足で、ただ命令されたままに人を殺せば良いだけの仕事。殺すくらいなら、私だってやらされてきた。気づかれないように、飲み物に毒を持ったり。それだけじゃなかった。私の方が、ずっと辛かった。だから、クロエちゃんにも同じ目にあってもらおうね？」

そっか……。

結局、この世界に俺の居場所なんてないんだ。この世界は、俺の世界じゃない。俺の本当の世界は、前世で俺が死んだ時に終わってたんだ。

期待するんじゃなかった。

なかったんだ。俺が求めてたものなんて、最初から。

「クロエと言ったか、こちらに来なさい。初仕事だ」  
もう、いつか。

俺は、そのままゆっくりと2人の男達の方へ歩いていく。

「良い子だ。自分の立場をわきまえて……」

「しね」

一匹の男が、その場に血を流しながら倒れ込む。

「な、貴様！ 一体何を」

「お前も、しね」

もう一匹も、黙らせる。

全く。武器を封じたくらいで、俺をどうにかできると思ったのだろうか。

俺は、世界一の殺し屋の弟子なんだから。得物なしでの雑魚狩りなんて、基礎中の基礎だ。

「カヤ」

「ひっ……！ ば、化け物!! く、来るな!!」

カヤは、俺の殺しを見て、逃げるようにこの家から出ていく。

何期待してんだよ、馬鹿。さつき諦めたはずだろ、それは。

もう、無理だっというのに。

やっぱり、俺は1人でいい。

俺はそのまま、カヤの家……いや、正確にはカヤの主人の家、か。から出て……。

「遅かった、か」

そこには、カヤの死体と。

「サツ……ト？」

俺のかつての同僚。

世界一の殺し屋の弟子。サツトが、冷めた顔で立っていた。

## 閑話 1　メス堕ちの心得

「というわけでえ！　クロエには、TS娘のメス堕ちについて、学んでもらおうと思います！」

そう言つてノエルは俺の眼前にドサリと、大量の分厚い本を持つてくる。

「え、何これ？」

「TS娘メス堕ちものの小説。全部私の自作だから、親友として、ちゃんと読んでね」

えーと、書籍化されてるってことですか？　え、この人TS娘メス堕ちモノの小説でご飯食べてるの!?　てかこの世界そんなにTS娘ってウケいいの!?

「本当は世間にも広めていきたいから、手始めに本にしてみたんだよね、私の妄想を。で、まあ私の小説の第1のファンとして、クロエが選ばれたってわけ……………まあついでにTS娘としてのメス心に磨きをかけてもらえればいいかなという思惑もちよつとだけ、本当に少しだけあるんだけど……………」

自分で本にしたのか……………。いや、それはそれで凄いんだけど…。まあつまり、自作小説を書いたのはいいけど、読んでくれる人がいないから俺に読んでくれと。

てかTS娘としてのメス心ってなんやねん。俺は男やぞ。

「BL本もいっぱい書いてただけだね。でも、まずはクロエにTS娘の自覚を持ってもらわないといけないから……ゲフンゲフン。いや、普通に忘れちゃったんだよね、BL本。今度持つてくるから、今日はTS娘メス堕ち本で我慢してね」

「ノエルさん、流石にその誤魔化し方は無理があらうかと思われます。後別にBL本もTS娘メス堕ち本も読みたくないです」

B L といいいいTS娘モノといいいい、この子性癖拗らせすぎじゃないか？

「うるせえ!! つべこべ言わずに読め! メス堕ちしろ!! このつ!! メスガキがつ!!」

「いや読むのは読むけど……。ああ、そうだ。勇者の癖にメスガキ人わからせられないなんて、おねーさんクソザコだね、ぎあこぎあこ」

「んゝつゝ……ふう。流石私の親友。私の求めてること、よく理解してるじゃない」「いやノエルに仕込まれたんだけどね」

たまにノエルは変態なおっさんみたいな目をする時がある。そういう時のノエルは、暴走するとどうなるか分からないから、俺はとりあえず求められた通りに振る舞うようにしている。そんな風にしていたら、ノエルのやつ、俺が何でも要求を飲んでくれるイエスマンだとも思ったのか、色々なことを要求してきたのだ。スカートをめくって誘惑しろだの、メスガキをやれだの、中年おっさんみたいな要求をしてくるノエルにはよ



く困らされた。あ、ちなみに今のノエルもその状態です。だからこんなにテンションおかしいわけ。面倒臭い……。

街の人は皆ノエルのことを美人で優しい勇者様だと思ってるみたいだけど、中身これだよ？

いくら親友とはいえ、流石にここまでの変態度合いにはドン引きだ。親しき中にも礼儀ありつて言葉、ノエルは知らないんだろうか。まあここ異世界だし、知らなくても仕方ないか。

「メスガキ属性はカバーしておいて損はないわ。男の心を射止めるための武器として、ね」

「メスガキ好きの男とか絶対ろくなのいないでしょ??

「はああああああああつつつつつつ?!?!?!」 クロエ、それは禁句よ。今ならまだ間に合うわ。全国のメスガキ好きの紳士に謝りなさい!」

まあ確かに、主語がデカすぎたかもしれない。別にメスガキ好きの男だからと言ってヤバいとは限らないし、まともな人だっているだろう。

「うん。そうだね。流石にこれは素直に謝罪かも。でも、やっぱり俺はメスガキ好きとかよくわかんないな」

「ふーん。そこまで言うなら、クロエ、貴方の性癖を聞こうじゃない」

「えー。別に性癖も何もないけど……。まあ、強いて言うなら……。幼馴染の子、とかが好みな」

よくアニメや漫画では、幼馴染のヒロインという存在が出てくることがある。そういう子は大抵健気で、献身的で、良い子ばかりなのだ。でも、ほとんど、ほぼ100%の確率で、その子の恋が実ることはない。もう本当に、何でかわかんないけど、大体正ヒロインらしき存在に負けて、失恋してしまうのだ。

まあ、何だ。そういう彼女達を見ていると、自然と応援したくなると思いますか、こう、なんだろう、頑張れって、結ばれないってわかっているからこそ、肩入れしてしまうというか……。まあ、アンダードッグ効果ってやつですね。はい。不利な方を応援したくなるっていう、それです。

という感じで、物語の中じゃ、特にそういう幼馴染ヒロインが好きだったから、強いというなら幼馴染の子かなって思ったんだけど……。

「……………ごめん」

ノエルさん、何故かガン萎えしていらっしやる……？ ノエル的には、幼馴染ってつまらない性癖なんだろうか。いや、まあTS娘とか好きな奴だし、普通の性癖じゃ満足できないんだろうなって思ってたんだけど、そんな萎える？

「てか、何で謝るの？」

「いや、だってクロエ……………」

ノエルは、口をモゴモゴして、すごく言いにくそうにしている。

「幼馴染って……………ほら……………」

暗い表情、謎の謝罪、その原因となったのは、幼馴染。

もしかして、俺の過去のこと、考えて触れづらく思ってるのか？

そういうえば確かに、俺の幼馴染の話もノエルにしたような……………。そっか、俺が幼馴染がタイプとか答えるもんだから、もしかしたら……………って勘繰っちゃったんだな。

さっきまでは大興奮で俺にメス堕ちモノの小説を勧めてきた癖に、変なところで気を回してくれるんだよね、ノエルって。変態だけど、何だかんだで俺のこと気にかけてくれる、本当に良い親友だよ。

「ノエル、別にそういうのじゃないよ」

「そうなの？」

「うん。前世から普通に幼馴染属性は好きだよ。まあそれもあくまで創作の中での話だし、リアルとは関係ないから」

「なーんだ。心配して損した」

「おい」

前言撤回。こいつやっぱり薄情だ。

「ま、幼馴染属性なんて弱者が好む属性……。真の強者はね、TS娘のメス堕ちを好むモノなの」

「性癖に弱者も強者もないのでは？」

「まあ、私の自作小説を読めば、クロエも高みへ行けると思うわ」

「へいへい」

まあ、でも、せっかく書いたのに誰にも読まれないっていうのは流石に可哀想だし、TS娘メス堕ちモノだろうがBL本だろうが読んであげるんだけどさ。

俺はそう思いながら、ノエルが持ってきた本の中から、適当に一冊取り出し、中身を開く。

えーと、タイトルが……。

『『TS娘口エちゃん天才美少女エルちゃんの甘々百合百合イチャラブ生活』……？』

「あゝっ！ 待ってクロエ、それはらめええええええええええ!!」

ああ、これ、もしかして。

「ノエルさん？ あの、口エちゃんって子、なんかどーつかで見たような設定してる気がするんですけど？ とうかエルちゃんってこれ、ノエルのことだよ、銀髪に金のメツシユで北国出身の勇者って……まんまじゃん……」

「違うのクロエ！ 誤解！ 誤解だからあ!!!」

本編の内容は、エルちゃんが『ロエ、私が貴方をメス堕ちさせてあげるからね』なんて囁いてて、それをロエちゃんが、『俺は男だ！メス堕ちなんてしない！』なんて風に激しく主張して抵抗するも、結局何だかんだでイチャコラするといったものだ。うん。身の危険を感じる。

「ノエル、ごめん。今日ちよつと帰るね」

「うわああああああんちがうのおおおおおおおおお!!!」

後日、めちやくちや説得された。